

教育課程部会の当面の検討課題（例）における論点 についての主な意見

【「基礎・基本」の徹底」、「自ら学び自ら考える「力」の育成」について】

○ 国語	3
○ 社会・地理歴史・公民	5
○ 算数・数学	7
○ 理科	10
○ 生活	12
○ 芸術	14
○ 家庭，技術・家庭，情報	19
○ 体育・保健体育	23
○ 外国語	26
○ 道徳・特別活動	29
○ 総合的な学習の時間	31

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底 (「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査において、漢字の読み書きなど基礎的・基本的な内容の通過率は、前回との比較で上昇。</p> <p>○ 国際調査 (PISA) において、文章や資料の解釈に課題。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査において、叙述に即して自分の考えや感想を述べる設問に課題。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査において、適切な語句の選択、文の効果的な使い方などに注意して聞くことに課題。</p> <p>○ 人の話を聞く姿勢が全然できていない子どもが増えてきている。</p> <p>○ 子どもにどのような力を育てたいかを明らかにし、目的意識や相手意識を明確にした学習指導や、対話や討論などの実践など、「伝え合う力」の育成に向けた取組が、徐々にではあるが確実に進められてきている。評価も、目標に準拠した評価や、いわゆるポートフォリオ評価という方法も出てきている。</p> <p>○ どういう言葉の工夫を行ったかをきちんと認識せずに、しゃべらせっ放し、聞かせっ放しになっている指導が非常に多い。</p> <p>○ 「書くこと」の指導は時間がかかることもあり、十分指導してこなかった面もあるのではないかと。</p> <p>○ 「読むこと」を中心とすると、ただ「教材を読むこと」に終わってしまう危険性がある。</p> <p>○ 書写の授業の実態として、本来の学習指導要領上の目標が非常に希薄になっている。</p>	<p>○ 入門期では、型というものが極めて重要</p> <p>○ 低学年のうちに、「聞く」ということを学ばせることが大切。</p> <p>○ 一方的な発表でなく、「何を話すか」、「どう話すか」という意識をきちんと伴った発表が重要。</p> <p>○ 表情、身振り、間といった手がかりが伝える場面では重要。</p> <p>○ 「質問する」「依頼する」などの話す、聞く活動を明示的に構造化することが必要。</p> <p>○ 日本の中では相当知力の高いグループであっても、その人たちの書く文章の論旨がたどりにくい。自己主張力や自己主張意欲とも関係するが、どのような文章、モデルが使われるべきか、望ましい国語力を見直すことが必要。</p> <p>○ 文学や情緒と関係ない、明晰な文章を書けることが重要。</p> <p>○ 音読は脳科学の研究からも大事であるとされている。</p> <p>○ 言葉は暗記であり、国語において美しい詩などを暗記させるような指導が必要。</p> <p>○ 漢字に関しては、実際はただ漢字を覚える学習にとどまっておき、それを実際に使いこなす、漢字を使って表現するところまでは必ずしも行き届いていない。</p> <p>○ 英語教育や情報教育との関連を考慮して、ローマ字指導の在り方についても検討が必要。</p> <p>○ 日本語をきちんと書く力、漢字を理解する力、言葉を作っていく力など、子どもたちが実社会に出て求められる力を総合的にパッケージで考えることが必要。</p> <p>○ 子どもたちにまず正しく美しい日本語を教えること、日本の奥深い文化に幼いころから触れさせ、日本の伝統や世界の中での日本について考えさせることが大切である。世代を通じての共通の言葉や情緒をもつため、日本人ならだれでも読んで覚えている共通の文章 (古典) を選定し、学年ごとに配置することを考えてよい。</p> <p>○ 外国語科の指導要領では、説明する、報告する、申し出るなどの言語活動の塊がリストアップされている。国語科でも必要。</p> <p>○ 一定の時間、例えば3分でまとめて自分の主張を表現できるようなことも基本的な知識・技能として必要。</p> <p>○ 日常生活の中で辞書を引くという習慣を少しでも身に付けさせるということが、語彙の豊富さ、言葉の確かさを知る意味で大切である。</p> <p>○ 漢字が書ければあるいは読めれば、新聞が全部読める、新聞が最低限読めるようになるというような実践的な目標を明らかにしていくことが必要。</p> <p>○ 子ども達の周りにどのような文字を置いていくかという文字環境の整備も必要。</p> <p>○ 言語の役割、音声の役割、文字の役割などそれらの役割、働き、機能というものについての意識をもたせることが必要である。</p> <p>○ 国語力を考える上で、(1) 漢字や文法、語彙ということばそのもの、(2) それを使って論理的に話をまとめたりするなど運用する力、(3) 言語生活場面を学校生活での言葉の教育に持ち込む「言語生活力」の三つの視点から考えることもできる。</p> <p>○ 言語活動があり、その能力をつけるといったときに目標が明確になりにくい。今やっている目標に準拠した評価を一層充実させるためにも、目標を具体的に示していくと指導しやすいのではないかと。</p> <p>○ 国語は最も総合的な教科であり、他教科との関係を体系化し、相互に発信して影響を与えることが必要。また、すべての教科を通じて国語の大切さを位置付け、各教科における文章の作成や発表、ディベート等で国語の指導を行うことが有効。</p> <p>○ 日本文学は日本人のオリジナリティにかかわるものではあるが、言語能力と論理構造という日本語を扱う技術を教えることが国語の第一義である。</p> <p>○ 日本の国語教育の教材は少し文学作品に偏り過ぎており、自分が言いたいことを相手に分からせる論旨の展開を教えるような教材が重要。</p> <p>○ 型と応用の相互関係を見ながら、力を育てることが重要。</p> <p>○ 伝え合う力の「合う」の力を育てる必要。反応の仕方、質問の仕方、受けて返す言葉の指導など、具体的なことが必要。</p> <p>○ 漢字指導は語彙指導に結び付いている。書いて確かめて、認識して、自分の血や肉にしていくことが大切である。</p> <p>○ 文法事項や言語表現を分類して示す必要。例えば、引用、比</p>

		<p>喩、接続の表現など順序だてて体系化すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 現在の書写の評価は、書かれた結果を評価しているが、書かれる過程を重視する方向にしていく必要がある。 ○ 西洋のレトリックを日本の教育にどう取り入れるかが課題。 ○ 解説書、説明書、パンフレット等短い文章を含め、多読が必要。 ○ 「文化審議会答申」で読書の重要性が指摘されている。精読中心の授業だけでなく、多読へ導く学習指導が求められている。 ○ 国語のおもしろさに気付かせていくようなことを盛り込み、古典の扱いでも、名文の暗唱など、子どもたちに言葉の宝として引き継いでやりたい。
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>	<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程実施状況調査において、国語は大切だがあまり好きではない、記述式問題の無解答率が高いということが明らかになった。その現状に対して十分な対策がなされていない。 ○ 自分の気持ちや考えを適切に相手に伝え、生活上の問題を言葉で解決する力の育成が求められる。 ○ 情報メディアが発達している中、どのように国語の能力を育てていくかが大切である。パソコン活用能力の育成や、研究と調査といった「自己学習の力」の育成など、21世紀を担う子どもたちを育てるための新しい観点が必要である。 <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際調査（PISA）において、読解力が低下。また、論述形式に課題 ○ 教育課程実施状況調査において、記述式の設問の通過率が低下。（相手や目的に応じて、自分の考えを明確にして書く、根拠を明確にしながら自分の考え方を述べる力が不十分） ○ 問題文に正対して答えることができない、状況を解釈して自分なりの言葉で考えを組み立てることができないという状況がある。それは子どもたちが目的や方法について、その決断の場に自分が主体的に関わっていない部分があるのではないか。 ○ 国際調査（PISA2000）において、趣味として読書をする生徒が、諸外国に比べて少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 思考力や想像力を育成すること、言語感覚を養うことが国語科のねらいとして非常に大切。 ○ 批判的に情報（文章）を吟味する力が必要であり、こうした力は創造性、個性の土台であり、ディベート等の討論の力を育成する上でも重要である。 ○ 教科の枠を超えた指導が有効（例：社会科や理科の授業で作ったレポートを国語の時間に国語科の狙いに即して書き直させる）。 ○ テレビやIT化というメディア時代において、子どもたちの読書離れが国語力の低下に影響しており、国語だけでなく、各教科において、読書を通じて教育内容の理解を深めることが重要。 ○ 覚える力だけではなく、IT等を活用し、情報を読み取り、文章を探し当て、その情報を比較して、事実がどうか確かめる力が必要。 ○ 子どもたちに国語への「関心・意欲・態度」をはぐくむことを重視することが必要。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 国語力を考える上で、（1）漢字や文法、語彙ということばそのもの、（2）それを使って論理的に話をまとめたりするなど運用する力、（3）言語生活場面を学校生活での言葉の教育に持ち込む「言語生活力」の三つの視点から考えることもできる。 ○ メディア・リテラシーという観点から、英国やカナダなどで、批判的に情報に接していく研究があり、参考になるのではないか。 ○ PISA（読解力）で求められた論証力、論述力を明確にする必要がある。 ○ 児童生徒が、表現者として、筆者の書きぶりを吟味する。こういう読み方を工夫することが必要。 ○ 考えや意見に対する評価、吟味とともに構成を含めて、文章の書きぶりのよさや表現の特色などといったことを評価することができるということも必要。 ○ 美しい日本語、奥深い文化に触れさせ、日本の伝統などについて考えさせることが大切。 ○ 読書活動は、幼児期の読書体験が大きく影響する。家庭での言語環境が大切である。 ○ 読むことの目的、読みたいという気持ちを持たせることが重要。 ○ 文学的な作品では優れたものがあるが、論理的な作品でも定番でこれだけは読むことが必要というものを提示することが必要。 ○ 朝の読書が普及した原因として、教員も一緒に読む、感想文を求めない、何を読んでも良い、の三つが大きい。一方で、読ませたい価値があるものをどうやって読ませるかなどの課題もある。 ○ 国語力は国語科だけの問題でなく、初等中等教育で行う全教科にわたる非常に重要なポイントであるが、そのためには学校図書館、司書教諭の充実が必要。 ○ 短い文章ではなく、本を一冊まるごと読むということを積極的にやることを指導事項に入れていってはどうか。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査（ペーパーテスト調査）において、歴史の大きな流れや基本的な歴史的事象の理解、政治や経済の基本的概念の理解、世界的視野から見た日本の自然環境の理解などに課題がみられる。また、統計資料の読み取り・活用に課題がみられる。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査（教師質問紙調査）（「行っている」+「どちらかといえば行っている」の計）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「児童生徒の多様な考えやつまづきを生かした授業を行っていますか」 小学校 約 5 割、中学校 約 5 割 ・「観察や調査・見学、体験を取り入れた授業を行っていますか」 小学校 約 5 割、中学校 約 2 割 ・「どこをどのように勉強すればよく分かるようになるか、日ごろから個々の児童生徒にアドバイスや説明をしていますか」 小学校 約 6 割、中学校 約 7 割 ・「理解が不十分な児童生徒に対し授業の合間や放課後などに更に指導していますか」 小学校 約 2 割、中学校 約 3 割 	<p>○ 学習内容としてしっかりと身につけるべきものは、方針として、はっきり示すべき（県庁所在地、世界の国名など）。</p> <p>○ 社会科で海外の国について調べるのは小学校 6 年生の 3 学期であり、都道府県の学習についても、都道府県名を覚えることはあっても、例えば九州と北海道の風土の違いを学習する時間は少ない。これでは、調べ学習を行おうとしても、基本的な知識がないという状況である。</p> <p>○ 国際社会で対等に伍していくためには、自分の国を愛し、自分の国の歴史あるいは文化を自分の言葉で語れなければならない。現場で近・現代史が十分指導されているか、しっかりと議論することが必要。</p> <p>○ 学習の手がかりとなる基本的な概念については、中味を明確にし、生徒に実感させることが必要（人格の尊重、コストなど）。</p> <p>○ なるべく早い段階から、子どもにとって身近な、お金を通して、社会の仕組みを理解させ、勤労観・職業観を身に付けさせることが重要。</p> <p>○ 社会の構成員としての責任と義務、政治そのものの重要性をよく理解させることが重要。</p> <p>○ 民主主義、自由と平等など哲学的、倫理的な内容について、言葉だけでなくそれが何かを問わせることが重要。</p> <p>○ 学校における問題行動や犯罪の低年齢化などの問題を考えると、小学校 3、4 年生から、社会の成り立ち、個人が社会において果たす役割やルールなど、社会的な規範性を身に付けさせるようにすべき。</p> <p>○ 学習内容の現状が、アカデミックな観点が中心で、市民生活面からのニーズに十分合致していない。</p> <p>○ 市民生活に必要な力を明確にした上で、それを前提として学年や教科に内容を配当するという方法も考えるべき。</p> <p>○ 国際化、IT 化、知的財産権、環境の問題、企業の社会的責任などが日本の社会全体として遅れている。世界的な事象がある程度理解できる素養を身に付けることが必要。</p> <p>○ 日本人あるいは、社会人としてしっかりとした素養を身に付ける必要がある。そのためには、日本の伝統や文化、歴史の教育が重要。</p> <p>○ 働く人たちに目を向けさせ、それぞれ工夫していることや、それらの仕事が自分たちの日常生活を支えているものであることに気付かせることが必要。</p> <p>○ 資本主義経済社会の中で生きていく上で、金融経済について体験学習を通じて学ぶことは重要。</p> <p>○ 物事を損得で判断するのではなく、公正に判断できるような力を法教育で育てることが必要。</p> <p>○ 知識を、断片的な知識、教養知、科学知の 3 種類に分けて考えるべき。これらをどう整理し示していくかを考えることが必要。</p> <p>○ 社会について、知るという要素、分かるという要素、判断し生かしていくという要素、それぞれに基礎・基本と発展があり、また、それぞれに応じた指導方法があると考えられる。</p> <p>○ 断片的な知識のトレーニングも必要だが、断片的な知識のみを身に付けて体験をしても偏った子どもになるので、指導内容を構造化して示していくべき。</p> <p>○ 基礎的・基本的な内容は確実に身に付けさせられる内容まで精選することが必要。</p> <p>○ 学校で教えるべき知識が際限なく広がっていくようなことがないようにすべき。</p> <p>○ 基本的事項は、繰り返し学習が重要。</p> <p>○ 学習指導要領は内容中心で教える際の要領が不十分。外部人材の活用方法、地域学習の生かし方など、良い事例は提供できる。</p> <p>○ 子どもたちのベースとなる体験や感覚が非常に異なっており、小学校高学年での地理的内容、歴史的内容の指導が難しくなっている。総合的な学習の時間との関連を通じた体験が重要である。</p> <p>○ 講義で教えただけでは学校を卒業するとほとんど忘れてしまうが、体験を通して学んだことは鮮明に覚えているものなので、授業の中で体験をさせていくことが重要。</p> <p>○ 子どもたちに教養知が魅力あるものだと思わせる戦略が必要。</p>

子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）

①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容

○ 教育課程実施状況調査（ペーパーテスト調査）において、自分の考えを表現することなどに課題がみられる。

- 地域社会形成の担い手として意識化させることが必要。
- 育てたい力は、社会の形成者としての資質であり、合理的に判断する力、公正に判断する力を育てる必要がある。様々な歴史を経てようやく手に入れた民主主義体制が貴重なものであることに気づかせるとともに、民主主義社会、市場経済社会を支える「法」というものがどういうものか教える必要がある。
- 国際社会に生きる日本人としての自覚、日本人としてのアイデンティティを育てる必要がある。
- 社会科において多様性への視点を重視すべき。例えば、世界各地で同じ10歳の子どもがどういう生活をしているかを学ぶことで多様性が生まれる。
- 国際化の中で、しっかりとした宗教観を育てることが必要。
- 事実と知識を学んで、それを発表するだけでは不十分。社会の一員として、どう主体的に対応していくかが重要。
- 答えが一つではないことを教え、社会に出たときに様々な選択肢に対応できる力を育てることが必要。
- 問題意識が十分育ってない。地・歴・公民の総合力が不十分
- 他者と共存するため対話する力、コミュニケーション能力が重要。
- 新しいものを創り出し、よりよい社会にしていくために課題解決をしていくことができるよう、アントレプレナーシップ（起業家精神）の育成が必要。
- 発達段階に応じた空間的、時間的なものの見方や考え方、人と人とのかかわりについて身に付けさせることが重要。

②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法

○教育課程実施状況調査（教師質問紙調査）（「行っている」+「どちらかといえば行っている」の計）

- ・「課題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか」
小学校 約7割、中学校 約5割
- ・「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」
小学校 約8割、中学校 約4割

- 学んだり考えたりすることは、大人と接する中で身に付くもの。実社会で仕事をしている人や地域の人々の活用が有意義。
- 子どもが問題を考えるときの思考の流れに着目して指導や評価をすべきと考えるが、学校に行くとなっていないと感じる。例えば、発言するときに必ず理由付けをするといった指導が必要。どのように物事を考えるのかという指導をしてほしい。
- 学習や体験学習の後のフォローが不十分。考えさせる授業の例の周知が重要。学ぶ意欲が育っている授業について研究する必要。
- 関心・意欲・態度の育成が重要。子どもたちが学んだ知識を生かして自分で地域のことなどをデザインするような学習をさせることにより、自信を持たせることがやる気につながる。
- 課題解決を行う学習をもっと授業に取り入れていくことが必要。
- 学校の定期テストでも、知識のみを問うのではなく、思考力・表現力を問うような問題を出すことが必要であり、教員の作問技術を上げることが重要。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底 〔基礎・基本〕の徹底</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査において、計算技能など基礎的・基本的な内容の通過率は前回との比較で上昇（中学校の数学は、前々回との比較では低下）。</p> <p>○ 小学校の小数・分数の除法の計算や円の面積、中学校の角柱・円錐の表面積や体積などに課題。</p> <p>○ 小学校では作業的・体験的な活動を取り入れた授業を行っている教師が多い。</p> <p>○ 中学校では選択教科「数学」として補充的な学習・発展的な学習の両方を行う時間を設けている学校が多い。</p> <p>○ 習熟度別指導を導入する学校が増えている状況。</p>	<p>○ 系統的なカリキュラム編成は重要だが、その際、子どもの発達を踏まえた適時性を考慮する必要。</p> <p>○ 数量や図形に対する感覚、アルゴリズムのスキルの育成が大事ではないか。</p> <p>○ 小学校と中学校で繰り返し学習することや小学校で準備して中学校でしっかり指導するというスパイラル方式が適当な場合もある（計算や文字の使用、図形など）。</p> <p>○ 相似と地図の縮尺、反比例としてこの原理、グラフ関係など、数学的概念と他教科の学習内容との関係を十分踏まえて、各段階の内容を検討する必要がある。</p> <p>○ 例えば、四則計算や式の変形を正しく行えるといった基礎的能力などを身に付けさせるべき。</p> <p>○ 例えば、分数の計算はできるが、立式は十分にできないなどの現状がある。立式をする際に必要な意味理解を重視することが大切。</p> <p>○ 例えば、面積を求める場合、公式の機械的な適用になりがちであるが、面積を求める過程や意味を理解することが重要であるので、基礎基本の適用範囲を広げてとらえるべきではないか。</p> <p>○ 帯分数の計算がなくなったため、公約数や公倍数、方程式の基礎が弱くなっている。子供のつまづきと育てるべき力や系統性との関係を考えるべき。</p> <p>○ 小数、分数など難しい概念は早くから学習させ、何度も繰り返すことで、分かるようになるのではないか。</p> <p>○ 比例と反比例は小学校で教えるなど、ある概念を理解しようとするとき似て非なる別な概念を示してはじめて分かることもある。</p> <p>○ 例えば、小学校では合同や対称、正多角形を扱うとともに、図形と図形を関係付けて見るなど図形に対する感覚を豊かにすべき。</p> <p>○ 日常生活で確率・統計はよく使うので、充実する必要がある。</p> <p>○ 例えば、不等式は「数学Ⅰ」で学習するが、中学校段階で具体的体験的に学習することが望ましい。</p> <p>○ 内容として難しいものであっても、感覚的に知っておくことが必要な場合もある（円の面積、球の体積・表面積など）。</p> <p>○ 速さと時間の関係、物体の落下などを考慮すると二次方程式や二次関数までが日常生活で必要ではないか。</p> <p>○ 学習指導要領の基準性を明確にし、教育内容を基礎的・基本的なものに厳選し、補充的な学習を工夫するなどしてその定着を図るという現行の考え方は今後も維持すべき。</p> <p>○ 子どもにとって基礎基本として働くということは、知識・技能が使えるという視点が必要である。</p> <p>○ 例えば、三角形の面積を理解し、台形に広げるという学習指導要領の考え方は良いが、具体的な指導方法を示すことが重要</p> <p>○ 計算の技能を指導するときに、計算の意味理解をどう指導するか工夫が必要。</p> <p>○ いわゆる鶴亀算などを子どもに理解させることがあるが、方程式を使って理解できるという考えもある。</p> <p>○ グラフを使って事象を説明するときに、表をつくり、計算が必要となるため、データを活用する活動の中に基礎・基本を盛り込むべき。</p> <p>○ 学習する側の目線に立って、実生活で直面する現象を例にして公式のもつ意味を説明していくことが大切。</p> <p>○ 基礎的・基本的な内容を身に付けるためには、発展的な内容も取り入れながら考え方を広げていくということも必要であり、このことにより、基礎・基本の確実な定着につながるのではないか。</p> <p>○ 例えば、数学の専門家を育てるための教育の階段を上り切れない子どもに、どのような手当てするか。そのことをよく考えておかないといけない</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 企業研修では、記憶の理論を使って、暗記、穴埋め、事例研修など多種多様な教え方をしている。
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>	<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際調査（PISA, TIMSS）において、言葉や式・グラフ等を用いて自分の考えを数学的に表現する設問に課題。 ○ 教育課程実施状況調査において、計算はできるが、意味が理解できていない傾向がある。 ○ 国際調査（TIMSS）において、算数・数学が楽しいと思う子どもの割合が少ない。 <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 現行学習指導要領では、観察・実験、課題学習など体験的・問題解決的な学習の充実を図っている。 ○ 中学校では選択教科「数学」として補充的な学習・発展的な学習の両方を行う時間を設けている学校が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 算数・数学教育においては、その内容の理解や思考力の育成、文化の享受・継承など、今後も引き続き大切にしていくべき面がある。また、同時に、表現力やコミュニケーション能力、問題解決能力など時代や社会背景に応じて強調すべき面がある。 ○ 算数・数学教育で共通に求めたい資質として、例えば、計算力や統計的な見方などのように日常生活に結びついた数学的リテラシー、物事を論理的に考え、合理的に表現する力、探究心や豊かな創造性などが考えられる。 ○ 小学校では具体的な活動、中学校では帰納から演繹へ、高校は論証を重視すべき。 ○ 資料に基づいて判断する、根拠に基づいて説明することが重要。 ○ 算数・数学では、多面的にもものを見る力や論理的に考える力など、創造性の基礎を育てることを引き続き大切にしていく必要がある。 ○ 中学校で学習していた統計的な内容や標本調査は高校へ移行されたが、数学の内容の中では社会生活とのかかわりが深い。社会人として身に付けておくことが求められる内容についての検討が必要。 ○ 数の感覚、量の感覚、図形の感覚といった感覚や感性を育成する必要がある。 ○ 算数・数学はできる、できないが明確になることから、楽しいと思う子どもが少ないと考える。自分でできなくとも、面白い、素晴らしいなど鑑賞する力も育成すべきではないか。 ○ 数値を検証したり活用したりするため、サンプル数や有意差に着目したり、棒グラフや折れ線グラフの違いに気付きながら電卓やコンピュータを活用するなど実社会向け、日常生活向けの数学を扱ってはどうか。 ○ 数学はものごとを論理的に表す普遍的な言語としての性格をもつ。計算などの基礎だけにとどまらず、証明などきちんと論理立てて説明できる力を育てることが必要。 ○ 概数でとらえる力、大体このくらいになるという感覚を身に付けさせることが重要。 ○ 自分がどのように考えを進めてきたかを数式、言語、図などで表現する力の育成を重視すべきではないか。 ○ 確かめる、吟味するといったプロセスを振り返る力や判断する力を重視すべき。 ○ 日常的な概念の形成、多様な表現、柔軟な幅広い解釈、論理的な思考など、算数・数学教育に関連する国語力の育成が不可欠。 ○ 例えば、2×3が$2 + 2 + 2$であることを式に表すといった力が必要ではないか。 ○ 図や表に表す力、統計的なものを解釈する力などが必要ではないか。 ○ 知識や技能をなぜ身に付ける必要があるのか。先人の遺産の継承、思考の節約など、意義の理解が必要。 ○ 数学は世の中の道具として存在するだけでなく、数や図形の美しさや論理を追求していくことも大切。 <p>○ 理数教育は、人が考える力を養うのに大切であり、教師は子どもが疑問を持ったことにしっかりと答えられるような力をつける必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 算数的活動・数学的活動については、具体的な活動内容について例示したり、既存の領域を組み合わせ、活動や工夫をすること自体を主眼とする領域を設けてはどうか。 ○ 計算だけではなく、数学的な考え方も学習指導要領で例示するなどして、数学的な考え方を育成する指導を充実すべき。 ○ 数学の知識を持つことは大事であるが、それをいつ、どのように使えばいいかが分かれば、もっと数学のおもしろさを味わい、自分の学んだ知識を効果的に生かすことができる。 ○ 考えをまとめて整理したり、問い直したりするなど、自分でじっくり考える過程を大切にすべき。 ○ 子どものいろいろな考え方を取り上げ、話し合いの活動や比較検討する場面を取り入れる工夫が必要。 ○ 例えば、分数の計算を行う場合に、整数に数値を変えて考え

てみるなど問題の数値を変える，設定し直す，問題そのものを作り出すといった場面が必要ではないか。

- 数学的な考え方を育てるに際し，例えば，子どもたちが自分で問題を作り，問題の条件をかえてみたらどうかなど，発展的に考え，数学を作り上げていく工夫が考えられる。
- 高等学校段階では，セミナー形式を取り入れ，例えば生徒に授業で学んだことなどについて話しをさせることでより学習が深まることも考えられる。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能の徹底(「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 教育課程実施状況調査において、基礎的・基本的な内容の通過率は前回との比較で上昇。一方で、てこの釣り合いや質量保存の概念など基本的概念を問う問題で通過率(正答率)が低いものが見られる。</p> <p>○ 国際調査(TIMSS)の結果において、未習事項にも正答率の高いものも見られたが、既習事項に比べると低い。</p> <p>○ 教育課程実施状況調査において、観察・実験を積極的に行っている教師の割合が高い。</p> <p>○ 中学校の選択教科「理科」では、補充的な学習・発展的な学習の両方を行う時間を設けている学校が多い。</p>	<p>○ 生徒が自分で計画を立て、身体を使って観察、栽培、実験などを体験することが重要。</p> <p>○ 小学校では定性的に扱い、中学校では定量的に扱うなど、発達段階、学校段階によって扱いが変わるという発想で内容を考える必要がある。</p> <p>○ 繰り返し学習が重要。中学校でいくらかでも学習している事項は高等学校で定着しやすい。</p> <p>○ 小・中学校段階は経験で確認できる法則と粒子性の考え方を中心においてはどうか。</p> <p>○ 小学校の理科においては、熱や温まり方など、生活に密着した素材を重視していく必要がある。</p> <p>○ 天文の単元は、小学校4年で学習してから中学校3年まで学習しないので、増やしてはどうか。</p> <p>○ 物の三態(固体、液体、気体)の勉強はきちんとすべきではないか。</p> <p>○ 質量保存の概念の定着を図るためには、物質が粒子でできているということを中学校1年や小学校高学年でも取り上げてはどうか。</p> <p>○ 物理では仕事概念、化学ではイオンの視点、生物では進化と遺伝と発生が中学校段階で必要。</p> <p>○ 浮力や水圧についてはアルキメデスの原理とかパスカルの原理など指導すべきではないか。</p> <p>○ 酸性の溶液やアルカリ性の溶液を混ぜるとどうなるかというような定性的なものは、イオンで取り扱った方が子どもたちの理解が進む。</p> <p>○ 中学校で化学反応を学習してから、光合成を学習すると、その逆の場合に比べて定着度が違うので、学習の順序性にも配慮すべき。</p> <p>○ 花の咲く植物と花の咲かない植物の両方を学習することで、より理解が深まる。</p> <p>○ 生活に結びつけた理科という観点から、自然災害への対応力という視点を取り入れたらどうか。</p> <p>○ 「地球と宇宙」の領域など、地域の特色を生かした取組が可能な内容や生活と密着した内容については、柔軟なカリキュラムが編成できるよう、幅のある規定ができないか。</p> <p>○ 理科では、興味・関心を高めるため、実際に観察・実験を行ったり、見てみたりすることが重要。</p> <p>○ 子どもたちが具体的に操作をしたり、体験をしたりすることを重視する指導が大切。</p> <p>○ 学校においては、子どもたちになるべく早く結論を求める指導に陥りがちであるが、小学校から中学校にかけては、じっくり観察・実験に取り組みせ、じっくり考える楽しさを大切にすべきではないか。</p> <p>○ 基礎・基本の確実な定着を考えた場合、厳選すればするほど、十分な時間をかけて基礎・基本を教えることが必要。</p> <p>○ 生徒の興味・関心にも意識が向きすぎて、基礎・基本となる重要なことは嫌でも教え、たたき込むという姿勢が現在の教育に欠けているのではないか。</p> <p>○ 暗記させるのではなく、一つ一つの内容を子どもなりに理解できる論理性をもって教えることが重要。</p> <p>○ 子どもたちの体験不足など子どもたち自身に変化していることを念頭に置く必要。</p> <p>○ 発展的に捉えたりするなど見方を変えることで概念が定着することから、重要な科学的な概念について、スパイラルの指導が大切。</p> <p>○ 基礎基本を徹底させるためには、生活に結びつけられる指導、生活と密着した内容、小・中学校の内容の系統性といったことを考える必要がある。</p> <p>○ 地学分野は教室に入りきらない素材を対象としているので、今後とも野外観察を重視することが大切。</p> <p>○ 観察・実験を充実して行うためにも、十分な時間を確保したり、少人数で取り組めるような環境を整えたり、例えばティーム・ティーチングのような複数で指導できるような体制を整備したりすることが重要ではないか。</p> <p>○ 学校における備品等の購入予算は厳しい現状にあり、理科教育振興法による予算補助を増額するなど、学校で十分な教育ができる環境を整備するための予算の増加が必要。</p> <p>○ 大学時代に理科を専攻していない小学校教員に対しても、理</p>

		<p>科の趣旨や内容をきちんと伝えることができるような工夫が必要。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生活の中の科学的な事象に目を向けさせ、家庭でも科学を楽しみながら学べるカリキュラム開発を行うべき。
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>	<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際調査（PISA）において、科学的リテラシーの成績は高い。ただ、科学的な解釈を要する設問、論述形式の設問に一部課題がある。 ○ 教育課程実施状況調査において、日の入りの太陽の動きに関する問題など、空間的な認識やそれに基づく思考面に課題がある。 ○ 教育課程実施状況調査において、意味付けや関係付けについて説明を必要とする数問については、通過率が低い。 <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 現行学習指導要領では、観察・実験、課題学習など体験的・問題解決的な学習の充実を図っている。 ○ 教育課程実施状況調査では、自分の考えで、予想して観察・実験を行う生徒が増加している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 理科教育で重視すべき点は、①観察や実験等を通じて興味・関心を持たせること、②興味・関心を持たせた上で、知的好奇心を高めること、③知的好奇心を高めるとともに、理論付けを行う論理的思考力を育成すること、の三点である。 ○ 科学的な根拠や事実をもとにしながら考える、筋道立てて論理的に考えるといった科学的な見方や考え方ができる力をつける必要がある。 ○ 考える力を育成するためには、まずは体験することが重要であり、また体験したことを表現することが重要。 ○ 現象の観察や理解を科学的に論述するなど、科学的に考えたりする力、科学的論述能力を高めるといったような点も必要ではないか。 ○ 問題を見だし、予想を立て、それに基づいて条件を制御しながら実験をして、結論を得るといった問題解決能力を小・中学校一貫させた形で身に付ける必要がある。 ○ 自然体験や科学体験を通じて、自然愛護の心を育成することや論理をつくる楽しさを味わわせるような思考力の育成が重要ではないか。 ○ 学んでないこと、見たことのないものでも想像できるような力が大切。 ○ これからの子どもたちに必要なことは、能力を基盤にして、内容をうまく組織し、習っていないいろいろな問題でもある程度解ける、考えられるようにすることではないか。 ○ 定量的に扱うことが減ってしまったために、思考力とか論理性を育成しにくくしてはいないか。 ○ 小学校段階においては、自然事象に直接触れる体験を通じて、自分の言葉で語り、論述する体験を積むような学習が必要。中学校段階においては、体験から例を引いて、比較し類推することが必要。 ○ 電圧と電流、融点、沸点、酸化、還元、物体の運動など、科学の学習にとってグラフ処理は大切な思考法。 ○ 実際の社会でどのように役に立っているのかということや、なぜそうなるのかという論理や考え方などが必要。 ○ 生涯にわたって知的なものに関心を持ち学び続ける力を身に付けさせることが大切。 ○ 地球や太陽系のことを深く知ることや、自然災害への対応力や動植物を思う心情を養うことは、社会人として必須の項目ではないか。 ○ 子どもたちに論理的思考力を身に付けるためには国語力も必要であり、比べたり、抽出したり、関連付けたりすることの力を付けることは、理科でも、国語でも、算数でも必要となる。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 現象を科学的に考え、論述する力を高める指導の充実が必要。 ○ 科学的な視点に基づいてデータを検討し、考察し、科学的に表現するための時間を増やす必要。 ○ 科学的な読み物を読んだり、環境への視点を持つことにより、論じる力が育成されるのではないか。 ○ 日常の学習が問題解決の役に立ったという経験を通じて、理科が役に立つ、大切だと分かることが重要。 ○ 子どもたち同士の事象に対する価値付けや感性が違っていることを楽しみ、意見し合うことの面白さを感じさせる理科教育が必要。 ○ 子どもの自発的な意見を引き出すことは大事であるが、正しい科学的知識を持った専門家が、客観的に正しいとされている内容をきちんと定着させ、これに基づいて、子どもが次の考察をできるようにすべきではないか。 ○ 観察・実験を行うことが難しい場合、コンピュータなどを有効に活用したシミュレーションやモデリングを行うことも大切。 ○ グラフ指導等、観察、実験の技能の指導については、単なるスキルとして行うのではなく、探究の過程や全体の流れの中で位置付けないと習得率が悪い。 ○ 座学と実験、ITなども活用して論理的に思考したり、考えたりするプロセスのトレーニングを行う必要があるのではないか。 ○ 小学校に環境や科学の視点を入れることで、興味関心を持続させることができるのではないか。 ○ 高等学校においては、従来の板書スタイルの授業から、討論や議論をさせるような生徒の変化に対応した新しい指導法が必要ではないか。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 具体の活動や体験を通して、身近な人や社会、自然とのかかわりなどについて気付くことができている様子がみられる。</p> <p>○ 児童が活動の途中でいろいろな気付きをしているはずであるが、それを意図的・計画的に取り上げる手立てが不十分。</p> <p>○ 社会や自然などの対象への気付きだけでなく、自分自身の成長への気付きや次の活動に生かされるような知的な気付きなど、児童の気付きの質を高めることに課題がみられる。</p>	<p>○ 「家庭と生活」の内容は、家庭環境の変化を踏まえて見直すべき。（例えば、家族の温かさや家族に守られているという気持ちを育てる指導など）</p> <p>○ 「家庭と生活」については、家庭にあることを学校で学習するなどのやりにくさがあるが、内容的に非常に重要である。</p> <p>○ 低学年でも、生活の中の道具としてのお金について、その仕組みや働き、生活における位置付けに関する基礎的な知識を学ばせてもよいのではないか。</p> <p>○ お金は使う機会は生活科の授業でもあるが、お金そのものの価値についての学習は低学年では難しいので、高学年以降などで行うことが考えられる。</p> <p>○ 生活科の中で取り組むべき理科学的な内容を明示すべき。</p> <p>○ 生活科に理科学的な内容が不足しているという指摘があるが、生活科の内容の量的な面から見てもバランスはとれている。</p> <p>○ 生活科は、子ども自身が体験し、気づいていくことに意義があるので、上から下へおろしてこれをやらなければならないという見方は違うのではないか。</p> <p>○ 子どもを取り巻く環境の変化で考えると、メディアから子どもが随分毒されている。動物と親のかかわりと同様に、小さい頃から、情報の光と影の部分についても指導が必要ではないか。</p> <p>○ 生活科の役割は、人との関係を持つ技能をしっかり身に付けさせることではないか。</p> <p>○ 体験や気付きは、小学校低学年だけの問題ではなく、人の一生にかかわる問題であり、非常に重要な要素。</p> <p>○ 相互扶助の共存社会であるという仕組みと考え方を理解させることが生活科の軸となるべき。</p> <p>○ 社会や自然、自分自身とのかかわりに対して、どういう気付きをもたせていくのが生活科の基本。</p> <p>○ 小学校の場合、子どもの成長の視点が大事であり、生活科についても指導方法の工夫改善によって有効なものとなる。</p> <p>○ 生活科は自分とのかかわりが強調されているところが、他の教科との違いと考える。動植物の飼育栽培にしても、自分とのかかわりで見ているという、その中で気づいたことを大事にしているということだと思う。</p> <p>○ 公共物との関連で言うと、電車に乗ってどこかへ行こうという学習活動をしたときに、子どもが自分たちで実際に体験したことから、白線の意味や駅員のアナウンスの意味に気づいてくれたと思う。生活科は具体的な体験を通して、そこにあるものの意味を子どもたちが気づく、感じ取ることが重要。</p> <p>○ 体験を通して学ぶことが重要であり、そのことにより、生活科の目標である気付きを子どもが持てるような指導が重要。</p> <p>○ ただ活動すればよいのではなく、活動の価値付けをしたり、一人一人の子どもの発見を大事に位置付けたり、伸びるように支援したりすることにより、豊かな学びになる。</p> <p>○ 子どもが体験しても気が付かない場合などに、子どもに気付かせたり、子どもの気付きを明確にしたりするような、教師の言葉がけにより、科学的な見方につながるような気付きが可能。</p>
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p> <p>① 次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p>	<p>○ 発表したり表現したりする活動自体はできている様子がみられる。</p> <p>○ みんなで一つのことをする楽しさを知り、協力することができている様子がみられる。</p> <p>○ 動物を飼ったり、植物を育てたりするなど生き物に親しむことができている様子がみられる。</p>	<p>○ 人とのコミュニケーションが希薄化している中で、生活科での人とかかわりについての学習はますます重要。</p> <p>○ コミュニケーションは直接対話だけではない。手紙やメールなど様々なコミュニケーションメソッドがあることに対応すべき。</p> <p>○ 「自分の成長」にかかわる内容については、生活科の学習の評価にかかわる問題だと思う。現状は、1年、2年の最後にやる単元という発想が強いが、どのような活動においても自分の成長をその単元において感じて残して、年度終わりにも振り返ることが大事なので、生活科全体を通じて大切にすべき。</p> <p>○ 小さい頃に、いろいろな体験を通じて、自分を肯定的に見ることができると、自尊感情を育てることが重要。自分という軸がしっかりないと、人や自然や社会と関係もうまく育たない。</p> <p>○ 伝えたい、上手になりたいなど、それに向かって自ら努力していく気持ちを育てることが大切。</p> <p>○ 学ぶことは楽しいという関心や不思議だと思う疑問をもてるようにすることが大事。</p>

<p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○単元末の発表を重視し、上手に表現させることを第一義とした指導がみられ、表現する過程の中で児童に考えさせる力を育成することを目指した指導が十分でない。 ○生活科がパターン化され、地域や児童の実態に応じ、2年間を見通した指導計画になっていない。 ○児童の興味・関心や体験の中から生じる児童の思いや願いを生かしきれない授業がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○異年齢の子どもで学べるのが生活科の特色の一つ。地域でも異年齢で学んだり遊んだりすることができなくなっており、生活科での異年齢で学びあったり、教えあったりする中で生まれる学びが大切。 ○学習指導要領で内容を2学年まとめて示されたことで、各学校で指導計画を見直し、1年生と2年生の学習の連続を考えて指導することができた。 ○1年生と2年生では、個々の児童で発達に大きな違いがあるので、内容を2学年まとめて示されたことにより、一人一人の子どもの実態を踏まえた指導が行えるようになった。 ○学習環境の構成や道具の用意などを工夫することにより、子どもは考え、工夫し、気付いていく。 ○自分で発見したことを話したり絵にかいたりして表現し、その表現を友達など他の表現と比較していく。それがコミュニケーション能力に高まっていく。
----------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底 （「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <hr/> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○音楽の授業は、歌唱、器楽、創作、鑑賞といった音楽活動のレベルでとらえられがちであるが、発達的特性に即しながら、音素材、諸要素、音楽の構造とそれらが生み出す曲想の美しさなどを感じ取らせる指導の充実が必要。</p> <hr/> <p>○楽曲を仕上げるのが目的になっている授業が見受けられる。表現したいイメージをもち、それを表すために必要とする技能、例えば、発声や楽器の扱い、読譜力などを身に付けさせる効果的な指導が必要。</p> <p>○音楽に対する解釈や味わいなどを、音楽的な用語を用いて適切に表すことができる能力を高めることが課題。</p>	<p>○知識・技能としては「音楽の諸要素」が大切であり、それらを分断してとらえるのではなく、関連してとらえることが重要である。</p> <p>○「音楽の諸要素」やそれらの働きを知覚・感受することが学力の中核となる。</p> <p>○知識・技能の獲得は、目的ではなく結果である。何のために知識・技能を獲得するのかを考えることが大切である。</p> <p>○「基礎・基本」を内容でとらえるか、学力でとらえるかという議論があるが、両方の関係性でとらえるべきである。</p> <p>○対象である音、音色、旋律などの違いを知覚する。そして、それらの関係性で生まれてくる曲想を感受する力、これが「基礎・基本」である。対象の違いを識別できること、そこに生まれるどっしりとした感じ、軽やかな感じなどの曲想を感じ取る力が「基礎・基本」である。</p> <p>○やはり中核は、感じ取る力であり、他の教科と芸術教科との違いがここにある。</p> <p>○ほんとうに楽しんでいる旋律、わらべうた、祭りの中で「わっしょい、わっしょい」するような、自分の肉体と心がいっしょになって、喜びを感じさせるものが、一番最初の基礎・基本に当たる。</p> <p>○音楽を構成する諸要素というものは、たくさんの様式の音楽があったときに、それらを総合するもののどれにも含まれているものと考えているのではないか。</p> <p>○一方、すべての音楽に共通するものではなく、それぞれの音楽の独自性も子どもと一緒に体験したり、理解する必要がある。</p> <p>○日本の伝統音楽、地域にある歌や音楽を材料にすることも「基礎・基本」につながっていく。</p> <p>○美しさを感じ、それを自分で表現するために必要な、基礎的な読譜力などをつけなければいけない。これは活動する中で感じ取りながら身に付けさせる必要がある。</p> <p>○「基礎・基本」というのは、知識・技能、感性・表現力、学ぶ意欲といった三つの部分を全部取りそろえたという形にならざるを得ないのではないか。</p> <hr/> <p>○正しい表現を技術的に教えるのではなく、内面で感じたことを表すための技能を育成していく必要がある。</p> <p>○子どもが音楽の諸要素の働き、曲想の美しさを感じ取るが、それを指導する側は明確にもっていて、何を感じ取らせたらよいのかという教師の意図、そしてそこに指導が出てくるということを教師がもたなければならない。</p> <p>○音楽は、後から録音を聴いて楽しむものではなくて、演奏しているときに感じ取れなくてはならない。</p> <p>○1人の子どもが1人の人間として成長・発達していくプロセスを大切にしながら、必ずしも体系性のない文化としての芸術や文化としての芸術や教科内容の系統性とどう調和させていくか幼稚園から高校までを体系立てて明確にするかが課題である。</p> <p>○外界を認識する「知覚」と、それに基づく「感受」を評価に位置付けて、学習の対象とはぐくむ能力を明確にすることが必要である。</p> <p>○自分がどう聴いたかを人に伝えるという、言語化は絶対に必要で、モーツァルトを聴いて、僕はここが好きというレベルから、背景的な知識も含めた高度なレベルまで、自分の感性をもとに自分の言葉を使ってその感想が言える、書ける、人に伝えられるということを訓練することが必要である。</p> <p>○音楽の諸要素と曲想、気分などが指導の内容になる。</p> <p>○感じ方を磨くということが、その子の人生を明るく豊かにしていくものである。</p> <p>○鑑賞して、どういうことを感じたかを表現することが重要である。表現しないと、この子はどれくらい分かっているか、どう感じているかということが分からないから、それを言語化し、どんなふう感じたかを何らかの形で表現することが大切である。ただし難しいのは、先生がそれをどう評価するかであろう。</p> <p>○生活の中で音楽を生かす、あるいは生活の中へ様々な音楽を発展させていく、生かす・ひろがる・広げるというようなことを、「基礎・基本」を徹底するための指導方法の一つとして考えてみてはどうか。</p> <p>○作曲・演奏・批評が一体で音楽が成立しているが、日本においては、批評する力まで学校の能力を集約していないことが、生活に結びつかない形になっている。</p>

子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）

①次代を担う子どもたちに身につけさせたい「力」の具体的な内容

- 音を音楽にしていくための資質や能力が教師にとって必ずしも明確ではなく、また、音楽をつくる資質や能力が、既成の楽曲の再表現活動でも生かされるということに対する理解が十分ではない状況が見受けられる。
- 我が国の音楽・文化に愛着をもつとともに、西洋音楽を含む他国の音楽・文化を尊重する態度等をはぐくむことが必要。

- 日本人あるいは、社会人としてしっかりとした素養を身に付ける必要がある。そのためには、日本の伝統や文化、歴史の教育が重要である。
- 心を伝えるということ、感動を伝えるということが一番の基本である。教育現場と文化は離れがちであるが、文化、情緒、心を教育の中に取り入れることが大切である。
- 日本の伝統的な文化がもっている価値についてほとんど教えられていないのではないか。例えば庭をみて感動するなど感性的なものをいかにして育てていったらよいかを考えることが必要である。
- 子供自身の発想に立った音楽あるいは芸術教育というものが大事であり、その根幹にあるのは自分自身の音楽的自立を目指すことである。そのために音楽をつくる活動の有効性や意味を考えていきたい。
- 鑑賞するということも一種の創造行為であり、そこには新しい意味、自分なりの意味、新しい美、自分を発見する、あるいは自分が今まで知らなかった異世界を発見することなど、全部含まれる。
- 謡曲、歌舞伎、三味線等の日本文化を知らない日本人留学生が多い。西洋音楽の技法だけではなく、日本人の音楽とは何かを考える必要がある。
- 和楽器の導入状況では、生徒指導上少し心配な子供たちも含めて、興味を示して、意欲的に取り組んでいる姿が非常に多くの学校で見られる。
- 地域の民謡を教材にした取組では、「何か体が自然に動いてきて楽しい」といった感想が出るなど、日本人としての感性が呼び起こされており、すばらしいきっかけになっているのではないか。
- 芸術教科の特性は感性を育てることであり、科学的な教科、言語的な教科と違って、数量で割りきれない質的なものを感じ取って表現することに独自性がある。
- 騒音などのモラル、インターネット時代における著作権の侵害の問題を議論する必要がある。

②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法

- 我が国や諸外国の様々な曲種を幅広く取り上げて、それぞれ独特の表情や味わいがあることをとらえさせる学習を通して、「音楽的な感受や表現の工夫」の実現状況を高めていく必要がある。
- 児童生徒に感性や表現力をはぐくむ鍵活動となる創作が、年間指導計画の中で十分に時数を割り当てられていない傾向が見受けられる。

- 日本の伝統音楽を教材として使うことは、絶対必要であるが、世界中の民族の音楽、それから西洋音楽、ポピュラー音楽、演歌なども含めて、すべての音楽が教材として使われるべきである。
- 子どもが感じ取っていること（見えないもの）を「見えるかたち」に表して見取っていくことが大切である。
- 様々な種類の音楽を羅列的に教えるのではなく、それらを通くものを明確にすることが大切である。「間」をつくるなど、日本の子どもらしさというものは西洋音楽をやっても内在化していることが明確に出ている。
- （音楽づくりでは）子どもたちは音そのものに向き合っていて、どう表現しようかと取り組んでいるが、どのように音楽として形づくっていくのかという部分は、教師の力量にかかわっている。
- リコーダーの技能的なことは、当然穴の押しえ方が分からないと困るけれども、それによってその子の感じ方が広がっていったり深まっていったりする意識を教師がもって、運指の指導に当たっているかどうかが一番大事ではないか。
- 地域性や地域の文化・芸能を生かした教育も必要ではないか。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会，専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底 （「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法，補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○材料や用具を使うことや表現することを楽しむ中で技能を身に付けたり，造形感覚を高めたりしている様子がみられる。</p> <p>○固定的な手順通りにつくらせたり，特定の表現方法に重点をおいて指導したりするなど，子どもの資質や能力が十分に発揮できない授業が一部に見られる。</p> <p>○自然や身近なものを観察し，形や色彩の特徴や美しさなどをとらえて描く力を育てる指導が十分でない。</p> <p>○「材料をもとにした楽しい造形活動（造形遊び）」において，楽しい活動をつくり出すことに重点が置かれ，学習活動に当たっての題材の系統性や指導のねらいが必ずしも十分でない。</p> <p>○個別指導などで考える視点を示したり，いろいろな技法を提案したりするなど，具体的な指導の手立てを講じることにより，発想が高まっている様子がみられる。</p>	<p>○昔のままではなく，今の芸術教育における子どもたちに伝えるべき基礎・基本というのは何か考える必要がある</p> <p>○教科にとっての基礎・基本は，上手に描け，上手に作れるではなく，子どもそれぞれの表現意欲や課題にふさわしい表現メディアや材料や方法を，その表現応答関係に導き入れる力である</p> <p>○絵が「うまく」描ける・彫刻が「うまく」つくれるという力，たくさんの美術史的知識を習得する事を基本だと考えるのではなく，生きる力の根底でありかつ総括である＜世界との芸術的な交渉(コミュニケーション)力＞</p> <p>○知識・技能の獲得は，目的ではなく結果である。何のために知識・技能を獲得するのかを考えることが大切である。</p> <p>○ノウハウ的な鑑賞だけをやって知識を得ても，本当の知識にはならない。</p> <p>○知識や技能を目的に応じて選択して活用できることが技能等を「確実に身に付ける」ことになる</p> <p>○美術で大事なことは，美しくしよう，心や気持ちがそこで豊かになる，どうしたら楽しくなれるかななど，一つの美を求める気持ちである。</p> <p>○技術を既存のできあがった枠組みでとらえるのではなく，多様な幅広いものとしてとらえるべきである。芸術をシステムティックに示すよりも，「芸術する」ことをどのように小・中学校の各学年に確保するかが大切である。</p> <p>○義務教育で9年間学んで何が身に付いたかを見ていく必要がある。感性をどう育てるかについて，理念はよいが方法が不明確であり，具体化させることが大切である。</p> <p>○西洋のアカデミックな美術の考え方から「基礎・基本」を考えるのではなく，多様な視覚文化を視野に入れる必要がある。</p> <p>○「基礎・基本」は算数と同次元にはない。表現の可能性を保証することから考える必要がある。</p> <p>○「感性的な文化に関わりながら，その新しい意味や形を作り出していく力」を美術を通して実現していくこと。</p> <p>○「アイデアを浮かべる」「発想する」「客観的な表現力」「芸術に対する愛好心」</p> <p>○日本の文化を理解し，すばらしさを理解させること。</p> <p>○他教科と同等の規準を見出すことによって「生きていくエネルギー」の芽をそいではいけない。</p> <p>○「子どもたちが自分のもともともっている力を発揮しながら，基礎的・基本的な資質や能力を伸ばすこと」</p> <p>○図工・美術では現行指導要領を実施して4年になるが，教師の価値観を一方向的に教えるのではなく，子どもが活動したり，考えたりしながら知識や技能を身に付ける授業が非常に増えてきている。</p> <p>○知識や技能，表現や鑑賞と分けたものを，つなげた教育の在り方や方向を模索する必要がある。</p> <p>○最初はまず態度を涵養し，その後で感性，表現力を育成し，そのしてその後に知識，技能などの育成をすること。</p> <p>○子どもが自分のやりたいことを見つけて学習の目当て，方法を具体的にできるかということのポイントに授業の改善を図る必要がある。</p> <p>○日本人あるいは，社会人としてしっかりとした素養を身に付ける必要がある。そのためには，日本の伝統や文化，歴史の教育が必要である。</p> <p>○多くの作品や表象を能動的に集め，批判的に検討し，その意味を探るなどの活動を通して，子ども達は自分で見るという地点に自ら達することが出来る。</p> <p>○引き出しを多様に持たせることが大切。一つ一つ積み上げていくことが重要。</p> <p>○古い作品があってもそれを鑑賞するのも一つの知識だが，低学年ではそれがどういうものか知るのには，後でいい。基礎になる実技の経験がなければ，本当の意味で感じ取っていることにはならない。</p> <p>○「基礎・基本」は試行錯誤，失敗，つまずき，振り返りなどを通して身に付くので指導方法を改善する必要がある。</p> <p>○知らないうちに身に付いたのではなく指導者が子どもたちに自覚させる必要がある</p> <p>○教師の力量の向上が求められる中，専任教師の減少が課題である。</p> <p>○相互評価，他者評価などを通して子どもたちが実感することが必要。</p>

<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>		
<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもの授業への関心の高さ，時間を忘れて造形活動に取り組む意欲，完成時の喜び，など「関心・意欲・態度」が高い様子がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ヴィジュアルな領域にかかわって，自己および世界の意味を産出的・形成的に捉える力，言い換えれば，生きる力の根幹を担う。＜芸術的に世界とかかわる力＞ ○子どもの育成には，感性の育成が大切である。芸術教育では技能等の指導に傾斜しているようであるが，子どもがものごとを豊かに感じ取ることをはぐくむことこそが大切である。 ○日本人はこんなものをつくりたいというところが一番弱い。豊かな人生を形成していく力のために，自分の心を形にしていけることが必要。 ○創造力や表現力，文化理解や人間理解が必要。中学校では，ビジュアル・コミュニケーションの能力の育成など，生活に役立つ美術の学習も大切である。 ○日本人としての感性も大事にしていく必要があるのではないか。 ○感性については一般的・抽象的・理念的なレベルでも，しっかりとした定義付けやなんらかの共通理解が必要ではないか。 ○西洋的な面のデッサンと東洋的な線のデッサンの違いなどからものとのとらえ方や文化の違いなどを理解し，外国との文化のコミュニケーションできることが大切。
<p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○体全体の感覚を働かせて発想や構想，自分の思いなどを豊かにふくらませたり，風，水，場所などの特徴をもとに造形活動を工夫したりするなど，学年の発達に応じて，資質や能力を関連的・総合的に働かせるような指導が成果をあげている。 ○情報や気持ちを伝えるために，形，色，材料などの特性を生かし，その効果を考え，相手に分かりやすく，美しく表現する力を育てる指導が十分でない。 ○子どもの高い「関心・意欲・態度」を，発想の能力や表現の技能などの育成に結びつけていない指導が一部に見られる。 ○子どもが主体的に考え，対象のよさや美しさを味わったり，美術文化への理解と愛情を深めたりするような指導が十分でない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○三つの論点（知識・技能，感性・表現力，学ぶ意欲）を関連させて育てることが大切であり，芸術における学力を構造的に考えていくことが重要である。 ○表現と鑑賞は相対するものではなく，表現をする中で鑑賞の能力が育てられる。制作をはじめることによって，いろいろな問題点を子どもたちは自分で見付け出し，必要があれば鑑賞に導くことができる。実技を力を入れてやらないと美術でなくなる。 ○これからの芸術に対応するためには，芸術教育のできる力を持った教師を育てる必要がある。 ○自分で組み立てたり，それを他者と共有したりしながら，表現が自然に発生していくベーシックな学習を子どもたちに保障する必要がある。 ○芸術，体育，生活習慣，自然体験など，創造力や体力を身に付ける活動が重要。 ○「楽しい造形活動（造形遊び）」の理念を小中学校あるいは高校の芸術教育の中に発展させていく。 ○日本の伝統的な文化がもっている価値についてほとんど教えられていないのではないか。例えば庭をみて感動するなど感性的なものをいかにして育てていったらよいかを考えることが必要である。 ○学年別の「目標」と「内容」とを分類整理して，各「内容」に対応する到達基準の系統性を明らかにし，現行の「内容」にこだわらずに小中を一貫した系統性で領域を考える。例えば「表現」と「鑑賞」の区分を上位概念として立てないことも考えられる。 ○文化芸術振興法にあるように，芸術文化団体のアウトリーチ活動やワークショップに参加することで学校教育活動全体を文化的にできる。 ○美術館や大学，地域，学校種間など連携して，アーティスト，子ども，教師などが一緒になりながら芸術活動をつくりだしていくプロセスの中で教育を展開させる。 ○学習指導要領では，どのようなプロセスで目標が獲得されるのかが不明確，それが今回の課題。 ○地域や保護者など学校の中で完結せずに多岐に学べることが大切。

芸術（書道）

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○書写学習が書道教育の基礎として位置づけられている現状がある。</p> <p>○IT時代において、自分の気持ちや伝えたい内容を自らの手で文字を書く意義が問われている。</p> <p>○中学校国語科書写から書道Ⅰへの学習の継続性、連続性が課題である。</p>	<p>○最近の社会情勢では、すぐに結果が出てしまう世界に子供たちはいるが、書道ではなぜ手で書かなければいけないのかということ問いかける必要がある。</p> <p>○美術や書道の中で、一つのものと一緒に一つ一つつくっていくことで、人間関係がとれるということを芸術が担っており、他の教科ではできないので、それにも視点を置いて、考えていかなければならない。</p> <p>○小・中学校では文字を正しく整えるという目的に沿って、書く行為をきちんと押さえる。</p> <p>○書道における基礎・基本は、鑑賞と表現の一体化、伝統として伝わってきた文化（硯などの用具を含む）として教えること、さらにそれらを使って表現する技能を育てることである。</p> <p>○基礎・基本ということを小・中・高等学校のそれぞれの段階において考えるとき、「書くこと」を発展的、段階的に押さえることが基礎・基本の根底にあるべき。</p>
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p> <p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<p>○古典に対する理解や表現力及び鑑賞力の育成</p> <p>○書道の学習活動を通して、自己の感性を働かせて書のよさや美しさを感じ取る能力の育成</p> <p>○漢字や仮名の表現力及び漢字仮名交じりの書の表現力を育成するための新しいカリキュラムの構築</p> <p>○鑑賞の能力を育成する具体的指導方法の確立</p>	<p>○書道の学習は漢字と仮名の学習が基盤ということはあるので、その学習から漢字仮名交じりの書の学習へ導くか、現場での工夫はあるものの一層の指導法及びカリキュラム開発が必要である。</p> <p>○書写の学習は、手書きする相手を意識し、伝え合う能力を育み、結果として人間関係力ということにつながるのではないか。</p> <p>○手書き文字は書かれた文字そのものに個性を感じ、その中に人柄も感じられる。そのような人間関係に関わっているのではないか。そんな能力育成に機能してはいないか。</p> <p>○書道の表現と技能が一体化した実践で、高校生が「山」なら「山」に対するイメージをふくらませて「山」を書きとして表現していた。そんなカリキュラムが必要ではないか。</p> <p>○硬筆か毛筆かは別にして、文字を一字一字作り上げる過程で思考しながら自分の文字を作っていくことこそ自分を表現する力、いわゆる自分作りに機能している。</p>

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会，専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <hr/> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法，補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>【家庭分野】 ○小学校の家庭科の学習が「よく分かる」「だいたい分かる」と答えた児童の割合は70.2%である。</p> <p>【技術分野】 ○内容「A技術とものづくり」と比較して「B情報とコンピュータ」の知識や技能の習得状況が良好である傾向が見られる。</p> <hr/> <p>【家庭分野】 ○中学校の内容「A(1)中学生の食事と栄養」の栄養素に関する内容や「A(3)衣服の選択と手入れ」の手入れと補修に関する内容において指導の工夫等が必要。 ○生活経験の違いや生活技能の低下に対応するための，実習等の時間の確保が課題である。</p> <p>【技術分野】 ○他教科との連携に配慮した指導計画の作成が課題である。</p>	<p>○中学校卒業で一人前という社会をもう一度取り戻すため，ものづくり教育や職業観を重視し，子どもたちの達成感やものづくりへの個性の反映などを実際に学び取らせることが必要。 ○まず学校で教えるべき，生活や社会や人間のために必要なことを考え，その上で，学校段階ごとに教科内容を検討することが必要ではないか。 ○日本の強みは，個人の技量の高さ，創意工夫して改善をすること，自分の仕事に責任をもつことであり，それらを意識して育てていくことが大事である。 ○食べて着て住まって環境と関わる実践の中で，できる，わかる，気づく，考えることを大事にし，よりよい行動ができるようにする必要がある。</p> <p>【家庭分野】 ○小，中，高等学校の学習の系統性について一層の検討が必要。 ○衣・食・住の基礎的・基本的知識・技能などとともに社会の変化に対応する内容も基礎・基本である。 ○知識とともに，技能が高まる程，自己効力感も高くなる。手や指の巧緻性を含め，基本的な技能を身に付け，実践につながるようにすることが大事である。 ○意思決定能力を育てるためには，社会の変化が激しい現代にあってその判断基準となる知識が必要であり「望ましい生活」，「望ましい共生」という Right Living（くらしをつくっていく時のきちんとしたよりどころ）という視点を基礎・基本として明確にする必要がある。 ○家庭は，子どもを産み育てること，着ること，住むことなど大切な生活の営みがされているという点を，特に小学校では基本とすべきである。 ○例えば，炊飯の学習には人の一生を通した多くのことが込められており，バランスよく食事をとって健康的に過ごすこと，固いものに水を加えて柔らかくするという調理の基本技術，ご飯の香りの漂う家庭をつくる等，多くの分野にまたがった学習ができる。 ○金銭や経済生活を実現するための読み書きそろばん的な基礎能力が必要である。 ○小学校の時に障害者と交流することは，中学校以降よりもむしろ内容の濃いものになる。</p> <p>【技術分野】 ○ものをつくる過程を通して，必要な知識や技術を教えることが大事である。 ○技術教育では，市民・国民として身につけるべき技術リテラシー（技術を理解し，評価し，管理できる力）を望ましいレベルまで向上させることを目的とすべきである。そこで，世の中で活用されている「材料の加工」，「エネルギーの変換・利用」，「情報の処理・活用」，「生物生産」に関する技術を取り上げる必要がある。 ○「B情報とコンピュータ」と高等学校の「情報」に関する教科・科目との連携が課題である。</p> <hr/> <p>【家庭分野】 ○学習した知識や技能を実生活で生かす力を育成するための指導の工夫が課題である。 ○家族を支え，家庭生活をつくることは，衣・食・住の具体的な活動と関わらせて指導することが大事である。 ○小学校の「(8)家庭生活の工夫」における，題材構成の一層の工夫や家庭との連携が課題である。 ○実現させたい価値についてはじめに考えさせてから，具体的な分野の学習に進むという方法もあるのではないか。 ○授業では限られた実習しかできない場合であっても，それを発展させるための指導の中身を工夫し，子どもたちの生活の中に定着させるようなことも考える必要がある。</p> <p>【技術分野】 ○日常生活におけるコンピュータの普及に伴い，操作の方法の指導の扱い方や，情報モラルについての指導の充実が課題である。</p>

子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）

①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容

○中学校の技術・家庭を「とても好き」「まあ好き」と回答した生徒は51.8%である。

【家庭分野】

○小学校の家庭科の学習を家庭生活で「とても役に立つ」「わりと役に立つ」と思う児童の割合は76.0%である。
○小学校の家庭科を「とても好き」「まあ好き」と回答した児童は63.7%である。

【技術分野】

○将来の職業としてIT関係や技術開発等を選ぶ中学生の割合が、他国と比較して少ない状況にある。

○家庭科、技術・家庭科は生活に最も密着した教科であり、社会が変われば内容も変わる必要がある。時代に応じて内容の見直しをするべきではないか。
○生活者としての技術教育にとどまらず、科学技術のガバナンスを教えることがなされていないなど、主権者としての国民を育てるという観点の教育がされていない。
○生活者や職業人であるとともに、市民として、技術を使用し、管理し、評価できる国民を育成することが重要である。
○国際化、IT化、知的財産権、環境の問題、企業の社会的責任などが日本の社会全体として遅れている。世界的事象がある程度理解できる素養を身に付ける必要がある。
○かつて家庭科を男女共修にした時のように、社会的ニーズに合致し、受け容れられる柱を明確にすべきである。例えば、地球温暖化を防止するために何を実行できるかなどが考えられる。

【家庭分野】

○社会や家庭生活の変化に伴い、食に関する指導、消費や環境に関する指導、幼児や高齢者との交流や介護を含めた人との関わりに関する指導、安全に配慮した住生活の指導などの推進が課題である。
○家庭科では、「生活を創造する能力」の育成が重要であり、生活課題を自分で主体的に解決する「自立する能力」と他の人々と「共生する能力」が、その2つの柱となる。
○共生する力の中には、自分たちの地域社会の中で自分たちも参画してつくる「自治」についても含まれる。
○小・中学校では、家庭における自分の位置について考える視点が必要であるが、高校では社会の中の家庭の在り方、地域との関わりなどについて考えていくことが必要である。
○高等学校の「家庭クラブ活動」の目標である「愛情」「奉仕」「勤労」「創造」は、家庭科の中でも重要な視点となる。
○健康で豊かな生活を自らの手で作り出していける実践力が重要である。
○生活に関わる問題解決能力を身に付け、生活を自己管理し、自立できる力を発達段階に応じて育てることが重要である。

【技術分野】

○ものづくりの経験が、計画通りに進める力、ものをうまくつくる力、構想を実現する力などを育てる。
○「ものづくり」を多く経験したと意識する児童生徒ほど自信を持ち、「働くこと」や「技術に関する職業等」への関心が高い。また、技術的行動がとれる子どもは創造的態度高くなる。
○技術に関する教育は、「技術の利用法や製品に対する技術的な評価力」「生産、消費、廃棄に対する技術的な倫理観」「技術的な課題を解決するための工夫・創造できる能力」「自らを律しつつ、計画的に行動を継続する態度」「勤労や仕事に対する理解力、職業に対する判断力」「巧緻性」といったものの育成を目指すべきである。
○技術分野において目指すものを、設計・製作やトラブル・シューティングといった問題解決能力として捉えることで、他教科や高等学校における他教科等との関連が明確となる。

②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法

○ものづくりなど実践的・体験的な学習活動を通して、児童生徒は完成する喜びや体験する楽しさを感じている。

【技術分野】

○生徒のアイデアを生かせる題材の工夫と、実生活に生かす指導の工夫が課題である。

【家庭分野】

○自分で献立を立てて実習することにより、生徒の自信を引き出し、実際の生活に生かそうとする意欲や態度を育てることが大事である。
○子どもたちが学習したことがらを家庭にもち帰り、それぞれの家庭で実践できるように働きかけることが大切である。
○実践的な態度の育成には、家庭生活に関心を向け主体的に生活に関わろうとする意欲を育てる指導の工夫が課題である。
○小学校では、家庭に生かされているという意識を子どもたちがもつと、「自分に何ができるのか」を考え、さらに能力をのばすことができる。

【技術分野】

○ものづくりができるようになることも大切であるが、一方で、ものづくりは目指す力を育むための有効な学習手段としての役割を担っている。限られた時間の中で、目的とする力をはぐくめるようにするためには、教材も含めた教案集といったものを開発する必要がある。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底 (「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○各科目とも、知識と技能の習得状況はおおむね良好。</p> <p>○生徒の情報機器の操作技能等は向上している。</p> <p>○コンピュータの操作の仕方など、情報技術の習得に重きを置いた指導が多く、情報手段の特性や情報を適切に扱うための基礎的な理論、情報モラル、マナーや遵法精神などを含むバランスのとれた情報活用能力の育成が課題。</p> <p>○コンピュータの操作の仕方などの情報技術を習得している生徒への手だてが不十分。</p> <p>○中学校技術「B情報とコンピュータ」との連携が課題。</p> <p>○国語や数学など、他教科等との連携の強化を図る必要がある。</p>	<p>○情報に関する状況は急速に進展している。変化も大きい。知識・技能で不易の部分と流行の部分があるが、基礎・基本としての不易の部分を教えていくことが大事である。</p> <p>○発達段階を踏まえて情報教育の目標、内容を明らかにする必要がある。</p> <p>○知識については系統的な学習が必要である。校種間の接続が大事であり、そのためには小中高で何をすべきかを示すべきである。</p> <p>○スキルの指導も大事だが、3観点(情報活用の実践力、情報の科学的理解、情報社会に参画する態度)をバランス良く身に付けさせることが大事である。</p> <p>○心への影響や情報モラル、情報の機能や本質について教えていく必要がある。</p> <p>○情報について、小学校や中学校で指導することが明確になれば、高校である程度リテラシーの確立した子どもたちに、モラルの面も含めて社会との関わりや、生活にどう生かすかという面の指導に集中できる。</p> <p>○小中高を通じて情報倫理教育、情報安全教育という柱を取り入れるべきである。</p> <p>○情報の加工に必要な、素材の科学的な特性等の知識を身に付けさせるべきである。</p> <p>○コンピュータリテラシーに依存するのではなく、コンピュータの特性、情報の特性等を科学的に理解させるべきである。</p> <p>○デジタル環境が人間生活に及ぼす影響とその対応(デジタルリテラシー)を身に付けさせるべきである。</p> <p>○小中高の各教科や領域に偏在している情報教育の内容を授業内容に反映させる。</p> <p>○小中高の各教科等の内容にみられる、無用な重複を排除する。</p> <p>○中学校技術の指導では、コンピュータを道具として活用する部分の指導と情報の技術の指導の部分があり、この切り分けをうまくやって身に付けさせたい「基礎・基本」を明確化する必要がある。</p> <p>○発達段階に応じてリテラシー、情報モラル教育、情報安全教育については、小中高の12年間のスパンで繰り返し指導することが必要である。</p>
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成(自ら学び自ら考える「力」の育成)</p> <p>①次代を担う子どもたちに身につけさせたい「力」の具体的な内容</p>	<p>○情報を目的に応じて表現する力の育成については、おおむね良好。</p> <p>○コンピュータの操作の仕方など、情報技術の習得に重きを置いた指導に占める時間が多く、合理的判断や創造的思考力、表現・コミュニケーションなどに役立つ力の育成が必要。</p> <p>○学ぶ意欲を育む指導については、おおむね良好。</p>	<p>○高等学校での情報は、情報活用の実践力の育成より、問題解決方法、表現力の育成に重点を置くべきである。</p> <p>○情報教育が目指しているのは問題解決能力である。社会に出た時に役立つ、必要な思考力・判断力を身に付けさせることが大事である。</p> <p>○表現もコンピュータに依存しすぎている。操作・技能としてアナログによる表現力の低下が著しい。</p> <p>○問題解決のための情報の収集、情報の活用、企画力、テーマの設定力等の力を身に付けさせるべきである。</p> <p>○問題解決に必要な分析力、計算力、表現力、計画力(アルゴリズム)、シミュレーション力を身に付けさせるべきである。</p> <p>○問題解決に必要な情報を分類、選択する力、試行錯誤することができる力、それらを自主的に行うことができる力を身に付けさせるべきである。</p> <p>○情報収集に当たって、情報を取捨選択することができる力、情報を活用することができる力、情報をまとめて表現する力(プレゼンテーション能力)を身に付けさせるべきである。</p> <p>○情報活用の過程や結果を評価し、再構築できる力を身に付けさせるべきである。</p> <p>○教科「情報」で取り上げる力は、コミュニケーション能力と問題解決能力である。</p> <p>○コミュニケーション能力や問題解決能力の育成との関わりで、応用力、創造力、展開力、洞察力、調整力を身に付けるべきである。</p>

<p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○各科目とも、思考力や表現力を育むための指導計画や教材の工夫が行われている。 ○体験的な活動を通じた情報モラルを育成する教材や指導法の工夫が課題。 ○発達段階に応じた問題解決能力を育成する教材や指導法の工夫が課題。 ○実習等の教材や指導計画の工夫によって、生徒の学習意欲はおおむね高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○思考については、操作中心なので課題解決型の授業が少ない。 ○今の生徒は全般的に意欲が低下している。内容を身近なものにするなどして意欲を喚起することが大事である。 ○意欲については全般に良好である。指導内容の無駄な重複を避ければ意欲を持続させることができる。 ○情報教育が特定教科だけで専門的に行われているという誤認がある。他教科での情報教育のありよう、可能性を明示し、分担させることが大事である。 ○小中高の発達段階に応じて、繰り返し指導を適切に行う。 ○中学校技術の指導では、コンピュータを道具として活用する部分の指導と情報の技術の指導の部分があり、これを整理した上で身に付けさせたい「力」を明確化する必要がある。
----------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

主な論点の柱	現状と課題	専門部会での検討結果
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法</p> <p>③ 補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 「すべての子どもたち」に共通して最低限必要なもの（いわゆる「ミニマム」）を、保護者のニーズや社会全体としての必要性等を踏まえつつ、「目的」として特定すること</p> <p>○ 高校を卒業した子どもを具体的に想定し、「最低限身に付けているべきもの」を具体的に検討すること</p> <p>○ 方向性のみを示すような抽象的目的を掲げないこと</p> <p>○ 達成度・成果が誰にも容易に分かるような具体的達成目標を示すこと</p> <p>○ 指導方法の工夫・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> すべての子どもたちが身に付けるべき内容を一人一人の子どもが身に付けているかどうかを常に把握すること 達成していない子どもがいる場合には、まずその「原因」を具体的に特定すること その上でその子どもに応じた指導方法の工夫・改善を行うこと 	<p>「身体能力」「態度」「知識、思考・判断」の3分野について、「すべての子どもたち」が共通して身に付けているべき「ミニマム」について検討を行い、一定の結論を得た。</p> <p>○ 身体能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 身体能力の要素 次の4つに整理し、いくつかの例を示した。 <ol style="list-style-type: none"> 「短時間に集中的に力を発揮する身体能力」 「持続的に力を発揮する身体能力」 「柔軟性を発揮する身体能力」 「巧みに身体を動かす身体能力」 生涯にわたり運動・スポーツに親しむための身体能力 <ul style="list-style-type: none"> 多くのスポーツに共通した要素を持つ運動種目や広く普及している運動種目等を通して、生涯にわたり運動・スポーツに親しむための基礎となる技能を習得すること <p>○ 態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 「運動やスポーツ自体」の価値に対する態度 「チャレンジすること」の価値に対する態度 「運動やスポーツを継続すること」の価値に対する態度 「フェアプレー」に関する態度 「協力・責任」に関する態度 <p>○ 知識、思考・判断</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動やスポーツに関する知識 運動やスポーツに関する思考・判断 運動やスポーツにおける健康・安全に関する知識
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p> <p>① 次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <p>② 思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p> <p>③ 発展的な指導が適切な児童生徒への教育の在り方</p>	<p>○ 時間的な広がりへの留意</p> <ul style="list-style-type: none"> 生涯を通じて運動やスポーツに親しむ基礎の構築すること 生涯を通じて運動やスポーツに親しむ態度の育成すること 	<p>○ 身体能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 生涯にわたり運動・スポーツに親しむための身体能力 <ul style="list-style-type: none"> 多くのスポーツに共通した要素を持つ運動種目や広く普及している運動種目等を通して、生涯にわたり運動・スポーツに親しむための基礎となる技能を習得すること <p>○ 知識、思考・判断</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動やスポーツに関する思考・判断

主な論点の柱	現状と課題	専門部会での検討結果
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自他の命を大切にしなければならないという視点が必要であること ○ 生涯にわたって豊かな人生を送るために、健康の大切さを認識させることが求められていること ○ 子どもたちが健康や安全に関わる内容について理解することが重要であること ○ 子どもたちは将来親になる存在であり、親になるための準備として何が必要か、生涯を通じて自らの健康を管理し、改善していくために何が必要か、他者への理解として何が必要かという観点が必要であること ○ 指導方法の工夫・改善を行う必要があること 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 心身の健康について、すべての子どもたちが身に付けておくべき知識・理解として以下の整理をした <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な体の機能と発育・発達 ・ 食事、運動、休養、睡眠などの基本的な生活習慣 ・ 心の発達 ・ 心と体の関連性 ・ 欲求やストレスとその対処の仕方 ・ 主な病気の発生要因 ・ 喫煙、飲酒、薬物乱用の心身への影響 ・ 主な病気の症状 ・ 医薬品の有効性と副作用 ・ 保健・医療制度、保健・医療機関の役割 ○ 環境と健康について、すべての子どもたちが身に付けておくべき知識・理解として以下の整理をした <ul style="list-style-type: none"> ・ 身の回りの環境を衛生的に保つための様々な手立て ・ 環境への身体の適応能力と至適範囲 ・ 適切な温度、湿度、明るさ等 ・ 働く人の健康管理 ・ 空気、水、食品の衛生的管理 ・ 生活に伴うゴミ等の衛生的処理 ・ 環境汚染の健康影響 ○ 安全について、すべての子どもたちが身に付けておくべき知識・理解として以下の整理をした <ul style="list-style-type: none"> ・ 身の回りの危険 ・ 事件・事故の発生要因 ・ 自然災害の発生とその対処の仕方 ・ 避難の方法 ・ 応急手当の意義と方法
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p> <p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自らを価値ある存在と感じ、様々な課題を解決できるようにすることを目指すことが重要であること ○ 健康や安全に関する情報を主体的に収集・選択し、それを正しく理解し判断できる能力が不可欠であること ○ 習得した科学的知識を行動に結びつけるための意志決定や行動選択につなげる実践力をすべての子どもたちに身に付けさせることが必要であること 	<p>（心身の健康について）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 食事、運動、休養、睡眠などの重要性を理解し、自らの基本的な生活習慣を見直すことができる ○ 自分の年齢、生活活動に応じて必要とする食事の量や質について理解し、適切な食事を摂ることができる ○ 心と体の密接な関連性を理解し、様々な欲求やストレスに対して、自分に合った適切な対処ができる ○ 生活習慣病や基本的な感染症に関する知識を持ち、個人でできる予防手段を講じることができる ○ 人間関係の理解の下に、性感染症等についての基本的な知識を持ち、性的接触を避けるなどの行動選択ができる ○ 喫煙、飲酒、薬物乱用の有害性について理解し、喫煙、飲酒、薬物乱用を促す要因に気付き避けることができる ○ 自分の体の状態を理解し、病気にかかった際に、症状を的確に説明できる ○ 医薬品の有効性や副作用を理解し、正しく医薬品を使うことができる ○ 様々な保健・医療制度や機関などについての知識を持ち、適切に活用できる <p>（環境と健康について）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 身の回りの環境を健康的に保つことの重要性を理解し、良好な環境を維持又は改善することができる。 ○ 適切な温度、湿度、明るさ、換気などについての知識を持ち、必要に応じて調節することができる ○ 水や食品の安全性についての知識を持ち、安全な水や食品を選択したり、衛生的に取り扱うことができる <p>（安全について）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 身の回りの危険、交通事故や自然災害、犯罪等の潜在的な危険を予測し、それに対する予防手段を考え、的確に対処できる ○ 災害等の危険な状況において自分の身を守り、応急手当など被害を最小限にするための行動ができる

②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法		
保健の授業の実施における留意事項	○ 保健の授業を行うに当たっては、前記の指導方法の改善以外に、学校全体での取組、家庭・地域との連携や働きかけ、教員の資質の向上に十分留意する必要があること	○ 学級担任をはじめ、保健体育の教諭、養護教諭、学校栄養職員（栄養教諭）など関係者の連携・協力を進めるとともに、保健の授業のみならず、特別活動、総合的な学習の時間など、学校教育活動全体を通じて取組を行う必要がある ○ 家庭・地域の実態を踏まえた学校教育活動を行うとともに、家庭・地域と連携した活動を実施するため、 ① 保護者会や学校保健委員会等を活用して、子どもたちの健康問題についての情報提供や協力依頼、意見交換等を行うことにより、関係者の意識の向上を図るなど、健康教育に関する学校・家庭・地域社会の一層の連携を進めること ② 当該学校の教員だけでは十分な指導が行えない場合、必要な知識・技能・指導力を備えた人材を積極的に活用すること ○ 各学校・設置者は、研修会等の機会を活用し、実践的な指導方法も含め、教員に必要な知識や技能をしっかりと身に付けさせ、常に指導力の向上を図る必要がある

その他学校教育活動全体で取り組むべき課題

課題	留意点	専門部会での検討結果
<u>性教育</u>	学校での性教育の在り方、教科、道徳、特別活動における指導内容の体系化の必要性等について検討すること	性教育については、以下のような検討を行い一定の方向性を示すに至った。 (1) 性教育として求められる内容について ・ 学校における性教育については、子どもたちは社会的責任を十分にはとれない存在であり、また、性感染症等を防ぐという観点からも、子どもたちの性行為については適切ではないという基本的スタンスに立って、指導内容を検討していくべきである ・ 性教育を行う場合に、人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提とすべきである (2) それぞれの教科における性教育に関する指導内容について ・ 性教育は、体育、保健体育のみならず、道徳や特別活動など、学校教育活動全体を通じて取り組むことが重要であり、それぞれの教科等の役割分担をより明確にした上で、連携して取り組む必要がある ・ 学校における性教育においては、児童生徒の発達段階を踏まえて指導を行うことが極めて重要であり、それぞれの教科等における指導内容について体系化を図る必要がある (3) 指導計画の作成に当たっての留意点等について ・ 現行学習指導要領では、一般論として、総則で「家庭や地域社会の連携」の必要性が明示されているが、今後、以下のようなことを明確にする必要がある ・ 教職員の共通理解を図るとともに、児童生徒の発達段階（受容能力）を十分考慮することが重要であること ・ 家庭、地域との連携を推進し、保護者や地域の理解を十分に得ることが重要であること ・ 集団指導の内容と個別指導の内容の区別を明確にすること
<u>食育</u>	学習指導要領における食の指導の位置付け等について検討すること	食育については、以下のような検討を行い一定の方向性を示すに至った。 (1) 学習指導要領における「食育」の推進についての明確化 ・ 今後、学習指導要領の総則において、食育を推進することを明確にする必要がある (2) それぞれの教科等における食に関する指導内容の明確化・体系化等 ・ 食育を推進する観点から、給食の時間、学級活動、各教科や総合的な学習の時間などの学校教育活動全体の中で広く食に関する指導に取り組む必要がある ・ 各教科等で取り扱う食に関する領域や内容等の体系化を図る必要がある ・ 低学年より食に関する指導を積極的に行うために内容の充実を図る必要がある (3) 指導計画の作成等に当たっての留意点等について ・ 現行学習指導要領では、一般論として、総則で「家庭や地域社会との連携」の必要性が明示されているが、今後、以下のようなことを明確にする必要がある ・ 学校での取組とともに、家庭、地域との連携を推進し、保護者や地域の理解を得、それらと連携した取組を行うことが重要であること ・ 給食の時間を食育の重要な機会の一つとして積極的に活用していくべきであること ・ 関係する教科等における食に関する指導において、学校給食をより積極的に教材として活用していくべきであること ・ 栄養教諭や学校栄養職員が、関係する教科等における食に関する指導において積極的にかかわっていくべきであること

外国語

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底 (「基礎・基本」の徹底)</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現行学習指導要領では、音声によるコミュニケーションを重視し、3年間を通して「聞くこと」「話すこと」の言語活動に重点を置いている。 ○ 現行学習指導要領では、言語活動を行うにあたって、言語の使用場面の例として、あいさつ、電話での応答等を挙げるとともに、言語の働きの例として、説明する、質問する等を挙げている。 ○ 現行学習指導要領では、言語材料を基本的なものに精選し、日常生活にかかわる基本的な語を含めて、指導する語の総数を1000語程度から900語程度とし、動詞、名詞、形容詞などは適切に選択することとし、文を構成する上で必要な100語を指定した。 ○ 教育課程実施状況調査では、英語を理解するための基本的な構文などが一部定着していない。また、「書くこと」に関する文構造問題の分析では、語彙などの指導を十分行う必要があることが指摘されている。 ○ 教育課程実施状況調査において、「聞くこと」では肯定的に決まった応答表現が、「読むこと」では、文の意味内容が直接的に絵に結びつく問題について、概ね定着している。また、「書くこと」については、be動詞と一般動詞の併用や、代名詞の変化などについて、一部定着していない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今後は発信力を重視すべきであり、そのためには、レベルに応じた語彙力、文法力、発音、書く力が必要である。 ○ 日本人が英語を「話さない」のは、スキルがないため「話せない」という面もある。 ○ 相手の言ったことに対して応答するという形でのリスニング学習が中学校では多いと思うが、その際パターン化した対話練習になっており、適切な応答力は育成できていない。 <p>(語彙)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 言語の習得は基本的に単語量によるので、反復練習を通じて語彙数を増やすことが重要である。 ○ 話すためには、単語やセンテンスの蓄積が必要である。 ○ 教科書の語彙数が少ない。学校の教科書がいろいろなトピックがあって、毎回トピックが変わるので、定着しにくい。 ○ 中学校において学習すべき語を、過去に行った語彙提示に倣い、1200～1500語程度を提示する方向に戻したほうが良い。 ○ 語彙数に関して、何語までという指定はやめるべきである。 <p>(発音、文法等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 辞書を引くことや発音記号をきちんと教えることが重要である。 ○ 簡単な表現でも基本的な英語音のスキルがなければ日本語英語にしかならない。今後は発音や文法などスキルの訓練をもっと重視すべきである。 ○ 「文法事項」の学習は重要であるが、「言語活動」の学習をより重視すべきである。
<p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程実施状況調査において、成績上位層と下位層への分布がやや広範にわたっている。 ○ 教育課程実施状況調査において、授業が「分からないことが多い」「ほとんど分からない」と回答する生徒の割合が、他教科より高い傾向にあり、学年があがるにつれて上昇傾向にある。(中1：20.5%，中2：26.2%，中3 28.3%) ○ 中学校では選択教科として補足的な学習を行う時間を設けている学校が多い。 ○ 少人数または習熟度別指導を導入する学校が多い。(中1：35.0%，中2：39.6%，中3 40.6%) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 語彙も文法も単線型の指導が多いので、スパイラルに繰り返し指導することが必要である。 ○ 世界に通じる authentic な英語を教えるためには、教員自身が、英語と日本語の子音が生理学的にどのようなように作られているか、物理学的にどのような音になっているかを理解し、体得し、生徒に確実に教え込むことが必要である。 ○ 反復練習の不足により、語彙、文構造の理解の定着が不十分になっている。 ○ 一定のタスクのため、関連した文章を繰り返し読み、自分の意見を形成する場面を作るという指導法が求められるのではないか。 ○ 本当にきちんとした発音でなくても、例えば国際会議などの場で英語によるコミュニケーションは可能であり、必ずしもきちんとした発音の英語であることが求められているわけではない。

<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p>		
<p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程実施状況調査において、英語を聞いて詳細を理解することや概要や要点を理解することはある程度できるが、相手の話しかけに込められた意図を捉えて、適切に応答する力は十分身につけていない。 ○ 教育課程実施状況調査において、いくつかの情報を整理し、全体の流れの中で、それがどういう意味を持つかが適切に読み取れない傾向が見られる。 ○ 内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身につけていない。 ○ 教育課程実施状況調査において、英語が大切だ、ふだんの生活や社会に出て役立つと考えている生徒は、他の教科に比べて多い。好きだという割合は他の教科とさほど変わらない。学年が上がるにつれて低下傾向（好き・どちらかといえば好き／中1：60.5%，中2：51.0%，中3：48.7%）。 ○ 現行の高等学校の学習指導要領において、言語の使用場面の例として、電子メール、スピーチ、ディスカッションなどが、言語の働きの例として、歓迎する、報告する、賛成する、反対するなどが挙げられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 音声によるコミュニケーション能力は、読むこと、書くことと一体のものであり、これらの能力を総合的に身につけていくことが必要である。 ○ 英語力を考える場合には、「聞く力」「話す力」といった技術の習得だけではなく、英語学習に取り組もうとする「意欲」「学習レディネス」にも十分配慮すべきである。 ○ 英語で活躍できる人は、母語でも活躍できる。何が良いコミュニケーションなのかを身につけ、それを場面に応じて切り替えることができる能力が大切である。 ○ 日本人が世界で発言しないのは、言語能力の問題だけではなく、文化的背景による部分がある。言語的なスキルを身に付けバイカルチュアルになる必要がある。 ○ 現在の英語教育は、言語能力のうち、状況に即してきちんとコミュニケーションができる社会文化能力や社会言語能力に重点が置かれているが、自分の持っている限られた知識を使いこなす能力の観点で不足している。 ○ 小学校から大学までのどのレベルでどのような英語教育が必要かを総合的に検討する観点と、他教科を含む全体としてコミュニケーション能力をどのように育成するかについて検討する観点が重要である。 ○ 中学校3年間の英語を十分に使いこなせていないことが重要な課題となっているなかで、高校の部分を中学に下ろして内容を増やしていくべきではない。 ○ コミュニケーションばかり重要視されると、簡単な英会話に置き換えられてしまう。コミュニケーションは内容であることが強調されるべきである。 ○ 言いつ放し、聞きつ放しでなく、交渉することや、相手の情報量にあわせて自分の発信するものを調整することが重要であり、国際理解につながるキーとなる。 ○ 小学校から英語教育を行うことで、全体として時間を増加しゆとりのある教育を行うことができ、思考力や表現力の育成といった課題に対応していけるのではないか。
<p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現行学習指導要領は、実践的コミュニケーション能力を育成することを目標としており、教材について、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げることを求めている。 ○ 現行学習指導要領では、ネイティブスピーカーの協力を得たり、ペアワーク、グループワークを適宜取り入れたりするなど、指導形態や学習形態の工夫に配慮するよう求めている。 ○ 少人数または習熟度別指導を導入する学校が多い。（中1：35.0%，中2：39.6%，中3 40.6%） ○ 中学校におけるALTの活用時間数は、英語の総授業時数の2割程度である。また、半分以上英語を用いて英語の授業を行っている学校は、3割程度 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校では、感性教育を十分に生かした音声教育を軸にした英語教育、中学校では「働き」を軸にした文の理解と発信を、高校では多読と文法の理解を進めるような学習形態・指導形態をとる必要がある。 ○ 文を書かせることはするが、まとまったものを伝えようとする文章レベルの訓練が不足している。 ○ 単なる基本的な日常会話ではなく、ディスカッションやディベートなど、より認知的に高度な作業、知的興味や関心に合った内容を授業に取り入れるべきである。 ○ なぜ文章を書くのかということを生徒にはっきり示すことが重要である。読んだことや議論したことに対して自分の意見を書こうという意欲をもったときに力が付くのではないか。教員は文章を書かせるための指導法を身につける必要がある。 ○ ディベートなどで生徒の問題意識を掘り起こすことが、読んだり書いたりする意欲を引き出すことに結びつき有効である。英語は手段だという体験にもなる。 ○ 自己主張力や音声によるコミュニケーション能力、例えば、

である。

- 都道府県・指定都市教育委員会等では、スピーチコンテスト等、中学生を対象として英語の授業以外で英語を使う取組を実施している例も見られる。

質問能力や内容を踏まえて自分がどう応答するかを中学校、高等学校でどのように指導していくべきか検討が必要である。

- 音声によるコミュニケーション能力には、応答的な要素と知覚運動的なスキルの要素があるが、応答的なコミュニケーションを活発にするためには、少人数であることが必要である。
- 授業以外で意欲を持って学ばせるためには、ある程度の時数を確保していないとできない。また、短期間に集中して行うなどのある程度の集中が必要である。
- 目的を持って書くという場合に、ディスカッションやディベートの用意のために書くということがあるので、音声と読み書きを別々に扱うのではなく有機的に結びつけるべきである。
- 科目を融合させて、トピックを設定して同じテーマで議論をさせたり、書かせたり読ませたりするという授業のやり方は非常に効率的である。
- 外国語の教員が異文化を重視することは、子どもたちが異質さに対して敏感になりすぎるという危険があるため、避けるべきことと考えている。むしろ、同質のものを探すという態度を育てるべきである。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>生きる基盤となる確かな価値観と自主的・実践的態度の形成</p> <p>①特に重点を置くものの具体的な内容</p> <p>②指導方法の工夫改善</p>	<p>○ 小学校高学年から中学生にかけて心の発達が進まず、幼くなっている。</p> <p>○ 我慢できず、すぐにあきらめる傾向が強くなったのではないか。</p> <p>○ 学業や職業に対して無気力な若者が増えている。</p> <p>○ 生命に対して、実感をもって理解できていない子どもがいる。</p> <p>○ 諸外国に比べて自己肯定感が低い。</p> <p>○ テレビの視聴時間が長いなど、生活習慣が確立されていない。</p> <p>○ 学級活動：児童生徒の活動状況についての学校側が十分満足とする度合は、小学校で6割弱、中学校で4割強、高校で3割強。</p> <p>○ 生徒会活動：児童生徒の活動状況についての学校側が十分満足とする度合は、小学校で約7割、中学校で約6割、高校で約5割。</p>	<p>(価値観をはぐくむ上での理念と内容の整理)</p> <p>○ 生きる基盤としての価値観を育てることが必要。</p> <p>○ 道徳の内容をひとつの体系として選択・整理するには、大きな目標が必要ではないか(例えば、国際社会における日本人として、など)。</p> <p>○ よい内容だからといって背景にある理念が対立的なものを網羅的に提示するのではなく、対立しないかたちで処理できるようにしたい。</p> <p>○ 基本的な理念のひとつとして、「持続可能性」「異質なものと共存や共生」を考えてはどうか。</p> <p>○ 生涯を通じて人間として追求したいものと、身に付けなければならないものとの整理が考えられる。</p> <p>○ 道徳の内容には、理性で判断して分かる部分と感性の部分がある。両者を弁別して改善作業をすることが必要。</p> <p>○ できるだけ理性で判断できるようにすることが必要。</p> <p>○ 考えることと感ずることを想像力がつなぐ。</p> <p>○ 現実起こったことに含まれる問題を自分たちで見つけて考えることも、道徳で育てる基礎的な力ではないか。</p> <p>(4つの視点と内容例)</p> <p>○ 現行の「自分自身」「他の人とのかかわり」「自然や崇高なもののかかわり」「集団や社会とのかかわり」の4つの視点での分類はよくできている。</p> <p>○ 生命を大切にすることを育て、他者を傷つけないようにするには、自分の命の大切さが感覚として分かるよう自尊感情の育成が大事。</p> <p>○ 自尊感情をもって自分を大切にできる、社会の中で助け合って生きる、充実した人生という、「自助、共助、公助」が大事。</p> <p>○ 基本的生活習慣の指導は重要。</p> <p>○ 思春期においては、子どもたちが自分の感情を理解し、それを表現したり、コントロールしたりする力が大切。</p> <p>○ 中学校段階では、自分の人生は自分で切り拓く、自分の責任でチャレンジしていくことを教える必要がある。</p> <p>○ 思いやりや助け合いの大切さは、多くの仲間と体験的な活動などを実践することで実感し、一層身に付いていく。</p> <p>○ 人間関係のすばらしさを伝えることが大事。</p> <p>○ 生と死、自然の力など人間を超えるものとのかかわりに目を向け、我が国の伝統的な価値観を掘り下げていくことが必要。</p> <p>○ 自分とは異なる様々な他者と共に生きることが大切。</p> <p>○ 郷土や国を愛する気持ちをきちんと育てていくことが重要。</p> <p>(自主的・実践的態度の育成)</p> <p>○ 特別活動において、低・中・高学年の段階に応じて重点化すべき自主的・実践的態度などを明確にして育成する必要がある。</p> <p>○ 特別活動の位置付け、各内容の意味の明確化と内容相互の関連付けが重要。</p> <p>○ 特別活動は、体験自体を目的とし、総合的な学習の時間は体験から生まれる思考力や探求力を育成することを重視している。</p> <p>○ 道徳の内容は全教育活動で育てる必要があること、各教科等でしっかり指導する必要があることを明示すべき。</p> <p>○ 例えば、国語の中で道徳と関連させて感動のある実話などを教える、歴史を担った人などの足跡を教えることで感動のある知識として教えることなどが考えられる。</p> <p>○ 生命を実感させることなどについては、外部講師を活用するなどにより、授業を工夫することは可能である。</p> <p>○ 道徳教育は、人間の利己的なことなど否定的な面を伏せて進むことはできない。なぜそうなるのか踏み込む工夫が必要。</p> <p>○ 相手を大事にできる相手意識がなければ、相手の立場に立つことの大切さを教えてもだめである。価値観を育てるためには、肯定的な人間観、自己意識をもたせることが必要。</p> <p>○ 価値意識を具体的な事象の中で統合的に活用していくことにかかわる指導が必要。</p> <p>○ 盗んではいけないといった基本的なことを知らない子どももいる。してはいけないことはきちんと教えることが必要。</p> <p>○ 例外もあるルールについては、全面的に正しいものとして押し付けないでほしい。</p> <p>○ 道徳の内容はすんまり分りにくいものもあるので、「心のノート」のように分かりやすい言葉で示すことが大切。</p> <p>○ 郷土や国を愛する心については、それが自分の生活とどう結びついているのかを押さえることが大切。</p>

<p>自尊感情や社会性などの育成のための具体的な手立ての明確化</p>		
<p>①身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生命に対して、実感をもって理解できていない子どもがいる。〔再掲〕 ○ 諸外国に比べて自己肯定感が低い。〔再掲〕 ○ 友だちとのことが学校生活の不満になったり、他人といると疲れると思う子どもがいる。 ○ いじめの問題も引き続き取り組むべき状況にある。 ○ 諸外国に比べて、規範意識が低い。 ○ 他人の話が聞けない、自分をうまく表現できない子どもが増えているのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生命を大切にすることを育てる基盤として、自尊感情の育成が大事。〔再掲〕 ○ 自己肯定感や主体性をもって判断できる力の育成が大事。 ○ 人間関係のすばらしさを伝えることやコミュニケーションの場面に必要な聞く能力の育成が重要。〔再掲〕 ○ 人間関係では、嫌なものは嫌という力も大切。 ○ 相手の話を聞く、比べる、違いを埋めていくなどの力を発達段階ごとに明確にしていく必要があるのではないか。 ○ 今足りないのは、いろいろな問題を、子どもが自分たちで話し合っ解決する力を身に付けることである。 ○ 集団の中で協力し合いながら課題を解決し、よりよい個人や集団になることに喜びを感じる人間を育てることが大事。 ○ 学校など組織や集団の一員としての自覚、愛校心、連帯感、共に生きていく力を育てることが大切。 ○ 特別活動の目標について、望ましい集団活動を通して社会性や協力する態度を育成することを一層重視したい。 ○ ものの見方とともに、スキルの育成も必要。例えば、お礼を言うスキルを練習し、それを使ってお礼を言うと周りが喜んでくれる。こうしたことも、体験が乏しい今の子どもには必要。
<p>②育成するための指導方法</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分のよいところに目を向け、そこを大事にして個性をはぐくんでいくことが大事。 ○ 自尊感情は、家族や社会との関係性の中で育まれる。社会との接点を意図的につくる必要がある。 ○ 自尊感情は、学級活動や係活動、クラブ活動などの異年齢等の集団活動において、他者からの承認によって培うことができる。 ○ 自尊感情を育てる上で、教科の学習で分かる子どもが育つ教師の授業力も重要。 ○ 学級経営や保育実習等で役立感（効力感）をもたせることが大切である。 ○ 聞く力、話す力、司会する力等、スキルとして取り出せるものは取り出して、確かめていくことが必要である。 ○ 自己中心性や社会性の欠如が言われる中で、異年齢集団活動がしっかり行われるようにすることが大切。
<p>人間形成に必要な直接体験の推進</p>		
<p>①体験の具体的な内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティアなどで活躍する若者がいる。 ○ 学校行事：児童生徒の活動状況についての学校側が十分満足とする度合は、小中学校で約8割、高校で約6割。 ○ 学校行事の準備の時間が十分確保できていない実態がある。他方、行事が多すぎて消化に追われるという実態もある。 ○ 児童生徒全員が参加する社会奉仕体験活動は、各学年ごとに、小学校で2～4時間、中学校で4～5時間、高校で2～3時間実施。 ○ 社会奉仕体験活動を通じて、地域の一員としての自覚、環境への意識、コミュニケーションの大切さなどの成果が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな社会の中で若者の学ぶ目的が不明瞭なものとなっている。このため、体験活動が重要。 ○ 自然体験の中で感性を養うべきである。 ○ 思いやりや助け合いの大切さは、多くの仲間と体験的な活動などを実践することで実感し、一層身に付いていくので、実体験の機会や場を意図的・計画的に設定することが大切。〔再掲〕 ○ 異質な他者とかかわることは重要であり、自然体験、社会体験、生活体験などを行う場や機会を学校や地域社会の中でつくっていく具体的な方法を検討することが必要。 ○ たくさんの行事を次々に行うと、効果が薄くなるので、行事の精選が必要。 ○ 学校行事の精選という名目で、手間ひまかけてみんなで作る上げるものが削られているが、それでよいか。 ○ 学校行事が精選されているが、それぞれの行事がどういう意味を持っているのか、どういう力を子どもたちに付けているのかを考えていく必要がある。 ○ 集団宿泊行事は、現在は、ほとんど1泊2日。道徳の内容を意識した活動や一定の期間の確保が必要。 ○ 発達段階に応じた職場や職業などに関する体験活動が必要。 ○ キャリア教育として様々な活動が行われているが、好きなことを探すだけでは、働く意欲にうまく結びつかない。生きていく力、働く力を身に付けることが重要。
<p>②体験活動充実のための方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会奉仕体験活動や職業体験活動の受け入れ先を探すことが負担となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ メディア社会で、子どもの心のもちようが露呈しやすく、また仮想の世界に埋没しがちである。メディア経由でも対面の場合と同様、協調性や正義感が必要であり、また現実の豊かな体験が大切である。 ○ 体験活動を行うだけでなく、体験から学んだことを整理し、自分の生き方と結びつける時間をもつことが大切。 ○ 教員自身が社会の仕事の様子を把握できていない。PTAなどの組織的支援体制が必要。

主な論点の柱	現状と課題	教育課程部会、専門部会での主な意見
<p>すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能等の徹底（「基礎・基本」の徹底）</p> <p>① 「基礎・基本」の具体的な内容</p> <p>② 「基礎・基本」を徹底するための指導方法、補足的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方</p>		
<p>子どもたちに身につけさせたい能力の育成（自ら学び自ら考える「力」の育成）</p> <p>①次代を担う子どもたちに身に付けさせたい「力」の具体的な内容</p> <p>②思考力・表現力等の「力」を育成するための指導方法</p>	<p>（子ども）</p> <p>○義務教育に関する意識調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の集め方や調べ方がわかるようになってきた 小学生 76.2 中学生 62.6 ・自分の考えたことをうまく文章にしたり発表したりできるようになった 小学生 56.9 中学生 39.3 ・国語や算数・数学など教科で勉強したことが自分にとって大切なことだとわかった 小学生 80.5 中学生 55.7 ・自分の興味を持ったことをもっと調べたくなった 小学生 73.1 中学生 59.5 ・自分の将来の進路や仕事について考えるようになった 小学生 64.8 中学生 66.8 <p>○スクール・ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べ学習をやっていると知識が増えて視野が広がる ・調べ学習など先生にやらされている感じがする ・生活の中で必要なことが学べるので重要 ・将来のことについて学べるのでよい ・役に立っていないと思う。何を目的にしているかわからない <p>（教員）</p> <p>○義務教育に関する意識調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科の枠を越えた横断的・総合的な課題（国際理解など）について学習できる 73.9 ・自然体験や社会体験などさまざまな体験活動を行うことができる 82.4 ・自分で調べたり考えたりするなど、積極的に学習する意欲や表現する力が身に付く 65.1 ・教材作成や打ち合せなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくて大変だ 82.7 ・教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る 78.7 <p>○スクール・ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考える力が着実に伸びてきている ・基礎的な力がないため、テーマを決められない子もいる ・総合は学習意欲の向上につながる ・ノートなどの問題がある今こそ総合が必要 ・ねらいには賛同する意見が多いが、特に中学校で、準備・計画の負担が重い、教科の時間とのバランスなどの意見が多い。 	<p>○総合的な学習の時間は体験から生まれる思考力や探求力を育成することを重視したものであり、教科から発展したことを明確にすべき。</p> <p>○問題解決能力の育成や知の総合化が重要。特に小学校では、地域の社会、自然、文化の環境から体験を通して課題を見つけ、考え、解決していく能力や学び方が大事。</p> <p>○課題発見能力や課題解決能力など見えない学力を育むためにも、総合的な学習の時間は重要。</p> <p>○一番大切な「わからないことがわかるよろこび」を体験させていないことが問題。</p> <p>○自分の生き方を見つめさせることが重要。学習を通して、今までと違う自分に気づくことである。</p> <p>○①子どもが自己実現するという「個性化」、②その個も社会の中に生きるという「社会化」、③アカデミックなものという「学問」。この3つの柱が重要。三者の統合をめざすべき。</p> <p>○総合的な学習とは、教科の探求、自己への探求、社会への探求という3つの柱を統合していく学習ではないか。</p> <p>○教科の中で学んだ知を、教科の中だけでとどめるのではなく、教科間の関連を図り、知のネットワーク化を行い、日常生活の中でいかに総合化した知を生かすことができるかが重要。</p> <p>○相手に応じ適応するような能力は1つの体験では生まれてこない。多様な数多くのあらゆる場面に応じて対応できる力が総合の力ではないか。</p> <p>○専門分化した教科を総合したり、関連づけたり、自分の生活、社会、生き方と関連付けたりする学習が必要。</p> <p>○具体的な学びの文脈に応じて課題を見つけて、学習した内容を関連付け、応用させながら問題解決的に学ぶ学習が必要。</p> <p>○いかに学ぶかという学び方、方法知を身に付けることが重要。</p> <p>○総合的な学習の時間は、知識・技能をどれだけ獲得したかということではなく、学んだ力をいかに生かしたか、総合的な働かせたのが重要。生涯にわたって生きる力を育むことが重要。</p> <p>○日本人としてのアイデンティティーや国家観などから、どういふ日本人が必要であるか、どういふ資質が必要か、そこから個性を見つけて、個人的なレベルに結び付けていくという体系の中で、総合的な学習の時間を考えることが大切。</p> <p>○問題解決能力等の育成とともに、学習意欲の育成が重要。</p> <p>○小学校では「地域」、中学校では「社会」という言葉を手がかりに、総合的な学習の時間を考えたらどうか。</p> <p>○社会という現実慣例の中での知や学びのつながり、意識、役割、主体意識の高まりを見出していくことを、総合的な学習の時間の基礎・基本として提示できれば意義がある。</p> <p>○学ぶ力を育てる、自分を見つめる力を育てる、社会人として生きる力を育てるということを、総合の基礎・基本といってもよいのではないか。</p> <p>○総合的な学習の時間での具体の活動は、児童生徒の学習に応じて、学校で決める方がよい。</p> <p>○総合で何をやるかだけを考えるのではなく、個性を発見することや自分に必要なものが何か発見できるようにすることが重要。</p> <p>○知識は体験を通して精査される。我々大人は、体験の意味を理解する教育を受けきていない。そういうリソースがないから、教員に体験させる場をもっと与えていくことが必要。</p> <p>○「課題づくりー調べ学習ー発表」のうち、3分の2程度のところで学習が終わっている場合が多い。もう一歩踏み込む必要。</p> <p>○総合的な学習の時間は児童生徒の内発性を引っ張り出すような</p>

		<p>教え方をすることが必要。</p> <ul style="list-style-type: none">○教員の社会性をどう高めていくかという視点が必要。○「なぜ学ぶか」、「社会の一員としてどう生きるのか」という点へ立ち返って、ねらいを再度現場に認識させる手立てが必要○子どもたちの意欲や関心の低下への対応として、もっと「個的な学び」を保障することが必要。○地域の支援システム、学校と地域をつなぐコーディネート体制を考えていくことが必要。○子どもに教師が最初から教えるというより、子どもと一緒にやって教師が体験し、実は自分に何が不足していたかを発見して、具体の指導に結びつけていくことが大切。○教員が総合的な学習をやらない限り、子どもが総合的な学習ができるはずがないので、学校や教員が自ら考える機会が必要。
--	--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------